宮崎国際大学教育学部紀要『教育科学論集』第 10 号（2023）1-55 頁

北海道家庭学校寮長藤田俊二の校長谷昌恒との対話的関係とその意義

―寮生を仲立とする校長講話「ローマ人への手紙」に対する寮長藤田の応答を中心に―

河原 国男

要旨

本稿は、北海道家庭学校寮長藤田俊二が、校長谷昌恒とどのような対話的関係を示していたかという問題をとり上げた。その際、藤田の日誌資料を手がかりに、パウロ「ローマ人への手紙」に関する校長講話についての寮生の反応を仲立ちとした藤田のうけとめを跡づけ、創設者留岡幸助の開校前の「試錬」に関する論説(1897)との関連から、その対話的関係性の特質と意義を考察した。その結果、谷は学校を方向づける中心的な理念、とりわけ「試練」を理念としてうけ継ぎ、寮生、職員に提示するという役割を、他方、藤田は実践を通じてその理念を実証するという役割をそれぞれ果たしている特質が明らかになった。そのような協働的な行為の相互性が認められる対話的関係を通じて、谷校長―藤田寮長時代の家庭学校が「試練」を理念とする教育共同体として不断に構築していることが考察され、その成り立ちの構図を理念型概念として設定することができた。

キーワード：対話的関係、試練、教育共同体、留岡幸助、家庭学校、実証

１．課題と方法

本稿は、北海道家庭学校寮長藤田俊二（1932-2014,昭和 7-平成 26）の中期日誌 1)をとり上げて、校長谷昌恒（1922-1999/2000,大正 11-平成 11/12）に対して藤田はどうかかわったか、対話的関係といえるものでなかったを検証し、その特質と意義を解明するものである。

寮生一人一人を理解することをめざし、藤田が寮生とのあいだで、対話的として特徴づけられるコミュニケーションを実践していたこと、そしてこのような関係性が主要な絆となって同校を一種の教育共同体として成り立たせていたこと、こうした特質について、筆者は中期日誌を通じてすでに明らかにした。この先行研究 2)の末尾において、寮生と藤田との対話的関係を基礎にした、寮生を仲立ち（仲介者）として藤田との対話の諸局面として、次の二つの固有の場の問題が考えられると、筆者は指摘した。すなわち、台所での寮長夫人との対話の場、そして、以下である。

> 「家庭学校の中心的な場として、「難有」の扁額が正面に掲げられている「礼拝堂」において、同校生徒全員、及び職員を前にして語られる校長講話である。谷昌恒の語りは、藤田日誌において、どのような内容として寮生及び藤田によってうけとめられ、対話的コミュニケーションのなかに位置づけられているか」。

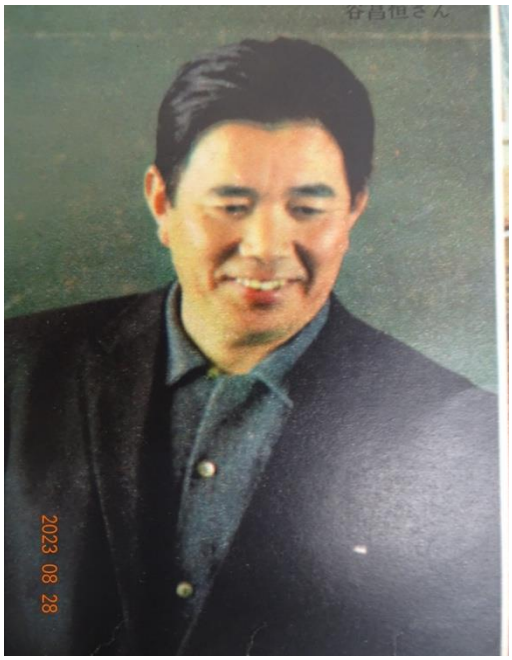
ここに設定された問題は、藤田と寮生との対話的関係に解消できない次の関心に支えられている。

第一に、谷昌恒研究。「学校を家庭化し、家庭を学校化」3)することをめざして北海道家庭学校を創設した留岡幸助、そして、家畜の飼育管理の技術から示唆をえた実験的精神で「教育」を構想し、戦

中戦後同校を「教育農場」として特徴づけた留岡清男とともに、この両者と並んで戦後日本の同校の発展に谷校長(**資料１**)はどのように尽力したか。1945 年大学卒業後、養護施設「堀川愛生園」を創設（1945）し、社会保障研究所主任研究員（1965-68）を経て、家庭学校に着任(1969)し、「信仰と実践」を基軸にしながら、家庭学校の伝統を踏まえつつ、どのように「教育の本質」を追求し、より一般普遍的な視野で、教育史上、あるいは社会福祉事業史に足跡を残していたか。

第二に、北海道家庭学校研究。同校が、法制度的に「児童福祉施設」であり、戦前・戦後においても、そして児童自立支援施設地なった 1998(平成 10)年以降においても家庭的養護を不可欠とするものでありながらも、―あるいは、それゆえにこそ「教育の場」あり、「学校」である 4)とするならば、そして誇張なしに「偉大な学校」5)であるとするならば、その時々の校長の下でどのような人間形成が明確な理念として言明され、寮長の指導のもとで教科等の学習活動、作業班での生産活動、寮生活の場で実践されてきたのか。

第三に、教育共同体としての特質把握。家庭学校は感化院、教護院、児童自立支援施設のように法的名称は 1 世紀の間、変更した。その間、少年たちは非自発的に「心ならずも」、その多くは児童相談所から「措置」され入校するにもかかわらず、寮長夫妻との寮生活、作業班活動、数々の激励（校長による「収穫感謝祭奨励の言葉」）と賞賛評価（「三賞」:「学業賞」、「作業賞」、「努力賞」）の体制、等の習慣づけを日々経験する。家庭学校は、この心身の習慣づけ通じて、次第に自発性を絆とする一種の教育の共同体として転化してプロセスとして存在してきたとすれば、その共同体は、歴史的に限定された家庭学校を超えて、一般普遍的にどのような教育「共同体」として特徴づけられるか、もしくは―法制上の意味ではなく、一般概念として―学校像を理論的に提起するものではなかったか。



資料１　谷昌恒校長

1971 年第 11 号の『暮らしの手帖』に特集記事として家庭学校がとり上げられた。全 18 頁。好意的な解説記事とともに、職員会議の様子、作業風景、教科指導する藤田、寮生活、ブラスバンドなど、さまざまな写真が表情豊かに掲載されている。その中の一枚。着任 2 年目 50 歳前の時。その 3 年後の 1974 年には、家庭学校機関誌と同名の谷の『ひとむれ―北海道家庭学校の教育―』が評論社から刊行される。第 1 集とは名づけられてはいない

が、同じ書名で以後続いた。第 8 集（1994）を経て、1996 年『教育力の原点―家庭学校と少年たち―』岩波書店、まで、講演活動とともに、同校の「教育」の姿を広く社会にむけて発信し続けた。発信するに値する「教育」が同校には存在し続け、「原点」として位置づけられうる視野で追求されていた、ということかもしれない。

こうした問題関心に支えられて本稿は、谷が着任して以来の中期の寮生を仲立ちとした校長谷と寮長藤田との関係がどうであったかを問いかけたい。その際、とくに藤田の谷に対するかかわりに着目する。藤田の寮生に対するかかわりが対話的であったこと、その具体的様相の局面についてはすでにわれわれは知ることができた。であるならば、藤田(在職 1963-1993,昭和 63-平成 5)は谷校長(在任期間 1969-1997,昭和 44-平成 9)に対しても、対話的といえる関係を示していたのではないか。そう予想できる。この点について明らかにし、その特質と意義を解明することを本稿は課題とする。

この課題に対する接近について。

1)あらかじめ見通しをもって跡づけよう。ミレーの「落穂ひろい」への 1979 年の谷の眼差しとそれに呼応する同年の藤田の眼差し、そして、藤田の仕事に対する谷の所見である。これらは、対話的コミュニケーションというよりも、対話的関係というべき共通基盤の存在とともに、内的な形で、問いかけと応答との相互性の成立とを示唆する。

2)特定の一寮生に焦点化して、その在籍期間を通じて、この寮生を仲立ちとしてどのように藤田は谷校長のことばをうけとめたか、そのなかで学校全体(当時藤田の石上館含め 7 寮舎)を方向づける理念的事項はどう位置づけられていたかを跡づける。相互性の成り立ちにかかわって視野に入れておこう。藤田日誌のなかで中期（1969.4~1983.11）に属し、全期間を通じて石上館ではもっとも長く、小学校第 4 学年から中学校第 3 学年まで在籍した寮生（整理番号 33）の日誌（その日付の記述の頁の前後には「日記」とも「感想」ともいわれる寮生作文も添付されている）をとり上げる。

3)「礼拝堂」での校長講話 6)に着目する。「パウロの書簡」から「ローマ人への手紙」についての講話が複数回確認できる。そのなかで、パウロのことばとともに、「難有」という礼拝堂正面に掲示された二文字は、谷校長によってどう語られ、寮生たちによってうけとめられたか。そして、それらは、どのように藤田によって応答されたか。藤田の日誌資料（寮生作文も添付）を通じて跡づける。

以上の 1）～3）いずれの場合も、日誌・作文の資料が現時点では未公刊であるので、該当部分については、倫理的配慮のもとで基本的に資料紹介の意味でその全体を明らかにする。

倫理的配慮等について。

日誌、及び生徒作文を研究対象とする本稿は、人権確保の観点から特段の倫理的配慮を必要とする。

1)生徒氏名、その家族氏名は匿名とした。石上館に属する生徒自身については整理番号で表記するとともに、本稿でとり上げた寮生はアルファベットで名前の頭文字を表記とした。

2)生徒の出身地等にかかわる地名は、市町村までの表記とした。

3)生徒の作文（「日記」「感想文」とも本人は表記）中に見られる誤字脱字は、原則的にそのまま表記した。なお、意味が判明し難い語句については（　）を付記し、意味を明記した。

4)校長以外の職員名も、記載通り実名とした。平本良元、花島政三郎、斎藤益晴、田中正国、村上時夫、加藤正志、甲田良作、以上の諸氏。

本稿は、筆者による科研に属する。その計画については、宮崎国際大学研究倫理調査委員会の承認（2021.6.8）をえている。北海道家庭学校学の学校長、理事長、特別顧問の諸氏からも科研上の研究計画(2021.9.22)について承認をえている。また、今年度着任した学校長からも、研究計画全体について承認をえた（2023.8.31）。

資料 2　「歩きはじめ」と題されたミレーの絵

筆者撮影。礼拝堂背面に掲示されている。礼拝堂内に掲示されている絵画はこれのみである。「長いきびしい人生の旅に歩き出そうとしている」と、谷は少年たちに語っている。『ひとむれ』1988 年 11 月 23 日、通巻第 577 号には、表紙及び、誌面上のカットも、すべてミレーの描画によって構成されている。藤田の編集による。

２.「落穂ひろい」と「落葉取り」―谷校長と寮長藤田の眼差し―

谷昌恒の著作『ひとむれ』第 3 集(1981)、に「ミレーのこと」と題した文章が収められている。1979 年の同名の家庭学校機関誌の巻頭言として掲載されたものである。同校の生たちに対して語られている。「本校の礼拝堂には、ミレーの絵が掲げられてあります。勿論、複写したものでありますが、題は「歩きはじめ」と言うのです。農家の庭先で、前にかがみ込んだ若いお母さんが、後ろから赤ちゃんの左右の脇に手を添えて、しっかりと支えているのです。赤ちゃんはその両の手をさし伸べているのです。…やがて赤ちゃんは母親の手を離れて、ヨチヨチと歩きはじめるでしょう。父親の広いむね中に抱きすくめられて、高い歓声を挙げて喜ぶ姿が、目に浮かぶように思えるのです」。

谷校長は、このように礼拝堂背面に掲示されているミレーの絵（**資料 2**）について述べた後、生徒たちにむけてこう述べる。「諸君は 10 歳から 15、6 歳まで、みな逞しい、凛々しい少年たちです。乳児院や保育園ではないのです。この絵に描かれているような赤ん坊ではありません。しかし、この絵はまことに本校にふさわしいと私は思うのです。諸君は長いきびしい人生の旅に歩き出そうとしているのです。しかも、多くの諸君は重い、辛い荷を背負っているのです。諸君の歩みがどうか堅実で、幸せ多いものであってほしいのです」。

なにかしらの困難を予想しつつ、自立にむけた期待がここに述べられている。こうした期待をはじめに述べて、谷はミレーの一生について語ってゆくのであるが、そのはじめに「とくに知られているもの」として「落穂ひろい」と題された作品にふれている。

有名なミレーの「落穂ひろい」はその〔「歩きはじめ」の〕前年、1857 年の作であり、又、翌年の 59 年には、「晩鐘」を書いております。…農村の真実を描く続けたミレーです。落穂をひろい集めたりするのは、農村の中でも最も貧しい人たちしかやらないことでありましょう。しかし、ミレーはそうした極貧の女たちを書いているのです。働くこと、働き続けることだけが、この女たちの毎日だと思うのですが、ミレーその姿を描いているのです。傲岸な女たちという非難を当時の批評家がしたと伝えられておりますが、3 人の農婦たちの姿は、まことに静かで泰然としているのです。

ここには「落穂ひろい」に対する谷の眼差しがある。この講話を聴く「諸君」に対する励ましと期待は、「落穂ひろい」する農婦たちの姿に重なっている部分があるだろう。そうした谷の眼差しと関連して、同年の藤田の寮生に対する眼差しに、ここに対比的に着目することとしよう。「落穂」ではなく「落葉取り」する寮生（F:**74）の姿に対するものである。

木の葉が一朝ごとに散り落ち、僕達は、毎朝地べたにへばりついている落葉を一枚一枚手ではぎとらねばならぬ。今朝などはもううす氷張っているだけに、道路の落葉取り（落葉掃きではない！）はほんとうに辛い仕事なのだが、一枚一枚丹念にはぎとっていた F の真面目さが僕らから遠い場所でいぶし銀の様に光っていた。なんにも喋る訳ではない、無駄な動きをするのではない、唯黙々と落葉を一枚一枚はぎとっては左手に持ちため、手にいっぱいになると林の中に捨てに行くだけの単純な仕事なのに、その単純さの中に真面目さと不真面目さの区別ははっきりあって、F の真面目な姿には、他の範となる筋男らしく通っていて、僕など唯感心して唸るばかり～。

藤田のこの記述(1979.10.23)は、どこかに掲載することを意図して書かれた原稿の一部ではない。したがって、「落葉取り」と名づけられた文章ではない。膨大な日誌のなかの一部にすぎない(**資料 3**)。素朴な字体でしっかりと記述されているそれは、埋もれた文章記述にとどまっている。そうであるが、見過ごすことのできない絵画的な印象をもって、少年の姿が描き出されている。ここに、「落葉取り」する少年に対する藤田の眼差しが示されている。

谷校長の眼差しに、「諸君」は将来どのように汗して働くだろうか、という問いが込められているとすれば、その問いに、―穂と葉の違いを超えて―図らずして呼応する。

後に論及するように、両者の間には、なにほどかの違いが推測されるにせよ、額に汗して黙然と「真面目」に働く姿に対する共感という一点で共通する価値意識が流れている。創設者留岡幸助が示した「流汗悟道」に連なる。

そうした意識を基盤として、両者はどうむきあって結びついていただろうか。

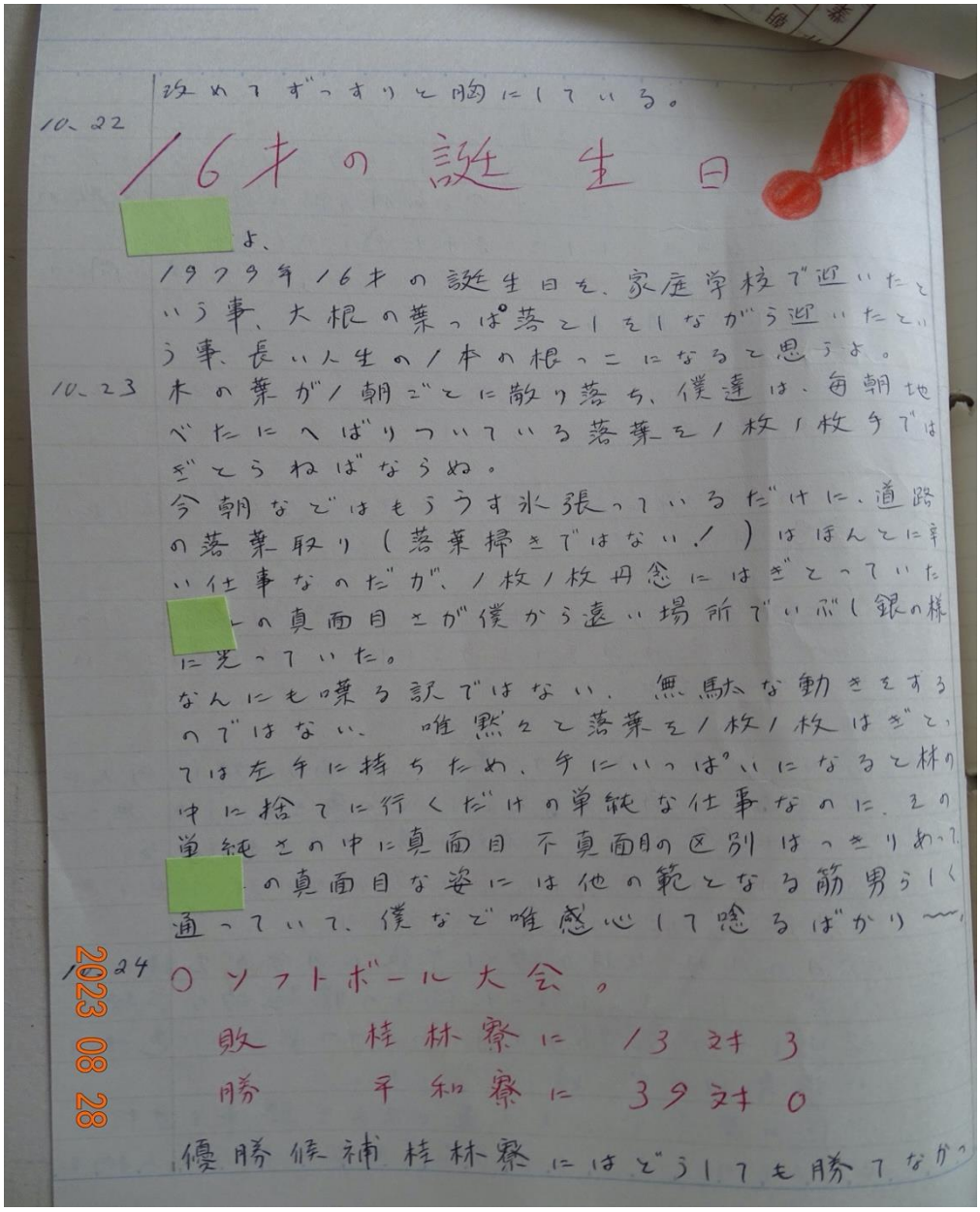
藤田は機関誌『ひとむれ』に、「日記抄」と題して、K（**16）という一寮生についての日誌の一部を抄録して掲載（1976 年 9 月 1 日 411 号）したことがあった。それについて、谷校長は、同機関誌にふれていた。卒業して 5 年後の冬 K から寮に電話が入った。電話のむこうに異常を感じた藤田は警察に連絡し、K のもとに出動するように要請した。昏睡状態のところを発見された。「目に見えない糸で、寮長と、かつての寮生の一人がこのように強く濃く結ばれていたことに私は感動した。私の希求するする教育は、先ずこうした教師と少年との人間的な信愛が前提とされる教育の技術がうまいとか下手だとか、生徒に甘いとか辛いとか、そうした次元の問題をはるかに越えているのである」7)。

こうした評価に、谷校長の藤田寮長とその実践―藤田に限らず、家庭学校の寮長夫妻全体を含めて

―に対する圧倒的な信頼の一端が示されていた。

そこに、谷校長の藤田をはじめとする寮長に対する問いかけを、われわれは捉えることができる。どのように寮生との関係を「強く濃く結」ぶことができたか、あるいはできなかったか、その際、谷自身しばしば求めていたように「対話的」といえる結びつきはどうできたかどか、という問いかけである。こうした問いかけはかならずしも明示的ではなかったかもしれないが、同時に期待として、寮長たちはうけとめていたであろう。

このように校長の寮長に対する関係性が予想できるとすれば、他方、藤田は、谷校長に対してどのようにむき合っていたか。校長―寮長という組織的な上下の関係性ももちろんあったであろう。日々の実践を支えていたに違いない。その点は否定し難い。しかし、そのような関係性を超えて、問いかけと応答が対等な立場でおこなわれるという、対話的と呼びうる関係もまた、同時に成立していたであろう。その場合、会話や意思伝達を伴う対話的コミュニケーションというよりも、マルチン・ブーバーのいう意味で「内的行為の相互性」8)が成り立っていたのではないか。そうであるとすれば、どのような内容と形であったか。共通の基盤のもちながら、それゆえにこそ、なにかしらの役割分担が―当事者間の合意を経ずとも―示されていたとすれば、どのような協働が示されていたか。本稿はさきに記した課題にかかわって、この点を中心的に検証したい。



10.22 改めてずっすりと胸にしている。

16才の誕生日

[redacted]よ、

1979年16才の誕生日を、家庭学校で迎いたという事、大根の葉っぱ落とりをしながら迎いたという事、長い人生の1本の根っこになると思うよ。

10.23 木の葉が1朝ごとに散り落ち、僕達は、毎朝地べたにへばりついている落葉を1枚1枚手ではぎとらねばならぬ。

今朝などはもううす氷張っているだけに、道路の落葉取り（落葉掃きではない！）はほんとに辛い仕事なのだが、1枚1枚丹念にはぎとっていた[redacted]の真面目さが僕から遠い場所でいぶし銀の様に光っていた。

なんにも喋る訳ではない。無駄な動きをするのではない。唯黙々と落葉を1枚1枚はぎとっては左手に持ちため、手にいっぱいになると林の中に捨てに行くだけの単純な仕事なのに、その単純さの中に真面目不真面目の区別はっきりあって[redacted]の真面目な姿には他の範となる筋男らしく通っていて、僕など唯感心して唸るばかり〜〜

10.24 ○ソフトボール大会。

敗　桂林寮に　13対3

勝　平和寮に　39対0

優勝候補桂林寮にはどうしても勝てなか

資料３　寮生Ｆの「落葉取り」について

中学3年の4月に入校。その年の5月9には、谷校長の「ローマ人への手紙」に関する講話に接す（後述）。8月19 日の谷校長講話を聴く F について藤田は次のようにその折の印象を記している。「じっと背中を伸ばして谷先生のお話に聴き入っていた F の後ろ姿がとても印象的だった。4 月 8 日から 8 月 10 日までが F の第 1 期だとしたら、8 月 18 日から（地名）へ帰る日までが第２期、どの様な思いがその脳裡を去来しているかはさだかには判らないが、何かを胸の中に期していることだけはたしかだと、僕はじっと F の背中を見つめたのだった。そして日旺の午後、R と 2 人、自分達の収穫ま近いメロンに水をかけていた真面目な表情も又とても嬉しかったのである。地に足つけた生き方かためていこう F！」。成長にかかわる期待がここには示されていた。それを裏切ることなく、秋を迎えた。

３．谷校長講話に対する一寮生の理解をめぐって―日誌に示された藤田の応答―

以下にとり上げるのは、寮生 147 名のうち整理番号 33 の寮生についての日誌の一部である。T と呼んでおこう。1971 年 12 月 1 日から 1977 年 3 月 14 日までの日誌記述がある。大学ノートは 16 冊に及ぶ。寮生一名についての日誌を分量として捉えれば、もっとも多い。小 4 から中 3 までの 5 年 3 ヶ月長期に及ぶ（**資料 4**）。

この日誌をとり上げるのは主に 3 つの理由がある。

第一に、この少年の「生き生きとした感受性」（1973.12.16）に対する藤田の共感と信頼感がひときわ厚いこと。

第二に、この「感受性」をふまえた理解力（1974.2.3）、作文を通じての再現能力、表現能力が、藤田の評価（1974.7.5）においても、その評価を離れて客観的にも見ても一定水準以上あって、際立っていること。誤字脱字等が作文中随所にあるのは他の寮生と同様であるが、それらは藤田の意識にはまったく瑣末なことにすぎない。

第三に、在籍期間が谷校長の着任（1969 年 4 月）3 年目以降の長期に及ぶので、校長講話等を通じての指導的役割がどのようなものであったか、その一端について一定の仲立ち（一寮生）を条件として長期間確認しやすいこと。

以上の事柄をうかがえる事例をここにふれておこう。藤田の T に対する理解という点で印象的なことの一つは、同じ寮生が公立の学校に「復学」することについてである。

1976 年 3 月 30 日「O(**46)卒業。小学校 6 年に復学。」と記して、10 センチほどの大きさで「！」が朱筆してある。そして続けて記す。「O(**46)にも今期になって告げた程に、今日の O(**46)の復学は秘密裏にすすめられて来ただけに T も含めて 12 人の衝撃は大変なものだった。小学校への又は中学校への復学は全部の生徒の夢の夢、それだけに慎重にすすめざるを得ないのだった。T は日記に、『～僕も今日考えたんだけど同じ 4 年生から来て、何故 O(**46)見たくうまく卒業が出来なかったんだろうなと考えた』。T の悲しい衝撃の深さがこの短かい言葉の中に静かに吐きつくされている」。

寮生活の出来事にかかわる、ここに示された藤田のことばには、寮生の胸中、少年なりの悲しい痛みの一端を寮長として共感的に理解しようとする姿勢が際立っている。

こうした共感の姿勢は、当の少年に対してどう貫ぬかれているか、それ自体検証に値する点であるが、以下におけるわれわれの関心は、この寮生を仲立ちとして、谷昌恒校長に対して、藤田はどのようにむき合ったか、という点である。

校長として着任したのは、1969 年 4 月であるので、この T 寮生に、谷校長は 3 年目に出会ったことになる。

なお、日誌の記述に添付された寮生の作文については、＊を付しポイントを下げて表記した。

資料 4　寮生 T についての藤田日誌

筆者撮影。卒業前日、「5 年 3 ヶ月、260 枚以上書き続けて」きたと、この寮生の作文について藤田は語っている。それらが、この寮生についての藤田日誌 16 冊に織り込まれている。単に量のみならず、その作文の質についても、藤田は日誌の折々に絶賛している。本稿の注 25)も参照。

1973.4.8

今日の礼拝は谷先生。小さい頃に鉛筆をにぎってせっせとメモをしていた T の姿が可愛いかった。だから、T の日記はきちんと物語風になっていて仲々面白いのである。

＊4.8 T 作文

今日の朝は、８時に起て、また僕は、掃除になってしまった。もう、掃除は、ごめんだと思った。前の、日直の掃除はきたなくてやだと思った。今日の午前中は、礼拝で、司会(司式)は、校長先生だった。読しは、校長先生が、本お、もってきて、小説のことお、読してくれた。これは、戸中から書た、すみには、父の足おもんでいた。皆父さんの、まくらもとに帰ってきた。母は、こちこちにもう、おばあさんになってしまった。さいわい父さんの病気が、ちかづいて来た。まだ、りんごのしるがあって、お父は、ぐいぐいのんだ。お母は、父さんの足お、ぐいぐいもんだ。お父さんは、元気に、たちおった。夜中、ねている時部屋の窓の外から、もといちようと、名をよんでいる。おばあさんの家までたずねた。なぜだというと、お母さんがとつぜんとことこ海べへ、むかっていくと、足あとが、かすかに、きこえる。あとから、父は、しびんおとってくれとゆうと、少し目があいた。それは、三回つづけた。それには、母さんが、きがつかなく、そのままそっくり、目おあいて、お父さんが、おこっている、かお見て、いた、お母さんは、さびしそうで、病気のせで、つかれている。

5.13

今日は母の日、谷校長先生のお話を聞いているのかいないのかあちこち見ながらももじもじしていた

T だったが、ちゃーんと聞いていたし、メモもちゃーんとしていたのである。日記を書いて来た T と、母さんのことをいろいろ話し合う。
「僕ね、ちょっと母さんの顔を知っているさ。母さんと手をつないで苫小牧の町を歩いたのを知っているよ」。
3 才位の時に T は母と別れた。母に捨てられたのではないんだ！愛想ずかし？（はっきりとは言いないけど）された父と一緒に暮らすことになっただけなんだ。きっと～。
「T、T が卒業する頃になったら母さんを探してやるからな！」
と言ったら、なんにも言わないで小さく笑っただけだった。T のことだ、内心は
「探してくれてもいいし、くれなくてもいいし、どっちでもいいよ～」
と太い思いで僕を見ていたかも知れない」

＊5.13 T 作文
今日の午前中は、今日 5 月になって、初めて、礼拝堂へ行きました。そして、礼拝堂の前のゴミおひろいました。この礼拝堂は、大正八年に出きた物だ。でもずいぶん新しい見たいだ。そして、校長先生の話しは、今日は、母の日だ。その中で、三つ話す。前来た本吉先生が来て鳥や山のこととか話してくれました。北海道のなんぶに、アイヌという人がいた。いしかりの、若者は、それにことわらなぐゆった。小学二年生が、いしかり地方に行った。これが一つ。第二、お母さんについて。皆お産んで、今日まで育ててくれた。朝から、夜までおせわになる。わかい先生は、少しうれしくなり、子どもたちに、一時間ぐらい話した。その子どもたちは、うなずきながら、聞いた。今日学校から、子どもが帰ってきた。その少年は、しくしくないていた。お父さんは、いじめられたのかとゆった。学校の先生は、いままで、そだててくれたお母さんに、ありがとう。とゆいなさい。今度は、第三、中学の友だち皆で、HR おする。先生が、お母さん、お父さんのことお書とゆった。一人の男の人は、せいじとは、お父さんと、お母さんがあいしあってもけっこんができない。

9.2
未だに行方の判らない 3 人のことについて、今日の礼拝で谷校長先生が辛い気持ちをこめてありのままに話して下さったのだが、T は手帳にメモをして貼付の日記を書いて来たのだった。
・去年の春に卒業した土居がひょっこり来校し、T を見て、
「大きくなったね　T は」
とびっくりしていた。T は T で相撲をいどんで嬉しそうだった。

＊9.2 T 作文
今日の午前中は、いつのまにか田中先生と校長先生が来ました。そして司会（司式）は校長先生がやってくれました。そして先生は無断外出のことを言った。それは向陽寮の 4 人組がにげたことをたまたま話しました。二十七日二十八日研修旅行と同じ道をとおって行きました。その 4 人組は滝川までにげ、わかい警察が 4 人組ののっていた車がなんかへんだから、止まったが滝川でちょっとのあいだその 4 人組がいなくなりました。所が札幌から電話がかかりその無断外出のにげた人が川にはいったと札幌あられんらくが来て、警察やじえたい(自衛隊)の人がその空知川でさがしてた。まだゆくえわはからないとゆった。そして一つの手紙を読んでくれました。卒業生は一年前に卒業をしたといった。あと校長先生が皆にもくとうをさして、校長先生一人でうたいました。うたわとてもながくかんじました。だいたい四番目ぐらいだった最後に、皆もこの家庭学校で勉強や作業とか一生けんめいがんばってほしいという話しでした。

12.16
今日の礼拝、司会（司式）は谷先生、マタイ伝 14 章 24 節から 33 節までのお話を中心に、含蓄の深いお話だったが、T の日記の末尾

〜でもよくイエスとかペテロとかが、よく水の上を歩けるなと思った。僕は今でも水の上を歩ければ、とても面白いなあと、今日礼拝の時考えました。でも、そううまくぜったいにいかないなあと僕は思いました。

木で鼻をこすった様に無愛想に最前列に座っているが、こんなにも生き生きとした感受性を持って聞いていることを、他の先生も生徒もわからないだろうなあ！

＊12.16 T 作文
　今日の話しは、マタイによる福音書の二十二音からで話しは、イエスは群衆を解散おされました。そしてその間に弟子たちを船に乗り込ませ岸に行った。そして群衆を解散してから祈るために山に行った。そして陸から数●●（2 字不明）離れており逆風が吹いて来た。そしてイエスは夜明けの四時ころ海の上を歩いて、その船の方へと行った。その船に乗っていた人は幽霊だと言っておじ惑い恐怖のあまり叫び声を出しました。そしてイエスは皆に声をかけてしっかりしなさいと言った。そしてペテロはイエスに言った。水の上に渡ってみとに行かせてくださいとイエスにたのんだ。ペテロは船からおりて、ドっとイエスの方へと進んで行った。ところがちょことよそ見をしたっけペテロはしずみかけ主よたすけてくださいと言った。するとイエスはすぐ手をのばして、ペテロをたすけました。今度はちがう話にかわって佐藤一斉と言う人が作った言葉で、一灯を提げて暗夜をゆく暗夜おをそれず一灯を頼めそしてむかしちょうちんをぶらさげ山道を歩いて前の方を見るととてもおっかなく、ちょうちんをおとしてしまってもえてしまった。でも今の話しとさっきのイエスの話しににているなと思った。そして僕はなんで僕たちが生まれていない時にいろいろことがおこったんだなと思いました。でもよくイエスとかペテロと言う人たちが、よく水の上を歩けるな思った。僕は今でも水の上に歩ければとても面白いなあと今日礼拝の時考えました。でもそう、うまくはぜったいに、いかないなあと僕は思いました。

1974.2.3
今日の日旺礼拝は谷校長、パスカルのパンセを引用してのかなり難しい話しだったが、T の理解の確かなのには感心している。
礼拝の終わった後の午後は、日暮れまでスキーにうちきょうじていた。
＊2.3T 作文
今日は、午前中は、日旺礼拝をしました。司会（司式）は、校長先生が話してくれました。校長先生の話しは、パスカルと言う人が世の中に二つの考えがあると言った。僕は、二つの考えとはなんだろうと思いました。それは、一つは、正面の思考、二、悲面の思考と言う事を言った。こいう事を言った。そして校長先生は、光は音よりと言う言葉を言った。そして、人間には、後、前があると言った。そして、一人今小説を書いている人がいる。この名前は、岩橋武夫と言う人がいた。この人は、中学三年のころから目を悪くしました。この人は少しでもお父さんとかローカーでうるさく歩くと、すぐおこってしまいますと言った。そして、いもうとがその兄にガアゼでしづかに目の前にやると手がふるえてしまうと言った。

3.2

木彫コンクール銀賞！

木彫コンクールで銀賞を受け、ほんとに嬉しそうに笑っている。審査では谷校長が

「T 君のが仲々いいぢゃないですか」

と特に推してくれたのが今も僕の気持を熱くしている。

4.5

48 年度 3 学期成績発表　　作業賞

49 年度 1 学期始業式

学級　平本学級へ昇級

作業班　野菜部（村上先生）

今日の日記中の

～僕はやっぱり校長先生からドクリツ（独立）の人だと言った。僕はドクリツだと思っていないが、先生がたでわ言っているんだなと思った。僕もなんだかドクリツの人だと言われてなんか変に思います。～

の T の独立の解釈が面白かった。T よ、この様に悠々と自分で考い、自分で生きていくのが即ち独立の精神なんだ！

平本学級に上がって 3 賞をとりたい。

という T の目標、是非実現せい！

＊4.5T 作文

今日の朝は、平和山に行きました。平和山は、六時半に行きました。今日は少し朝外から雨が降っていました。でも平和山より午前中の成積発表があって、僕も少し考えました。そして、初めわ加藤先生が話してくれました。その話しは、紙を見せて説明してくれました。初めは、三本柱と書いてていました。この三本柱とは、とても大事な事だと言った。それは、寮生活、学習指導、作業指導この三つがなければだめだと言った。そして加藤先生の話しが終わると、斉藤先生の司会(司式)で、一人一人来れました。賞状は、石上館でも、一部の人たちももらっいました。その内僕も持らいました。僕はきっと思って、一牧ぐらいわくれるなと思っていました。僕は作業賞をもらい、自分もあまり仕事をしたつもりでないんだけど、やっぱり甲田先生だと思った。でも今度の昭和五十年の三月には、学業賞を取りたいと思います。そして僕は今度の班でも作業賞を取って見たいです。僕は今ままで取ったのは、まだたったっの二牧しかもらっていません。僕は平本教室に上っていっぱいやりたいと思います。そして校長先生から一人一人の話を言ってくれました。僕はやっぱり、校長先生からドクリツの人だと言った。僕は、ドクリツだと思っていないが、先生がたでわ、言ってるんだなと思った。僕もなんか、ドクリツの人だと言われてなんか変に思います。そして、今の一学期から三学期まで、新しく始まるんだから、スタートして行きたいと思います。

7.5

早朝平和山に登り、夕方に作業終わっての T の一日、日記に書いている通りの 1 日でもあった。それにしても、T の一見不愛想な顔からは想像もつかない豊かな感受性と鋭い表現力で書き続けられている日記は貴重な作文集である。

河原国男

＊　7.5T 作文

今日朝、五時半に起きた。今日は、七月五日で平和山に登る日でした。そして学校の前に集つまり山に登った。今日の校長先生の話しは、悪い心と良い心のことを二つ話してくれました。良い心は、皆な、彫刻品を町にうり約十一万円ぐら町の人からこのお金を築ちくのお金に使ってくださいと言った。これがだいたい良い心と言うか少したすけてくれたと言った。これに感者していますが悪い心は無外をしたりして前楽山寮の三人組が無外をして新分に出たと言った。これを見た人は、がっかりしたなと思うと言った。今日午後村上先生の班は、長イモと、キャベツの間を草取りをしました。今日の作業は、なんか早く終わった見たいでした。夕作業は、掃除をして、外作業を手伝いました。

9.1

今日の日曜、午後から１人でこつこつと丸太を削って彫刻をしていて、僕と目が合ったら少し照れくさそうににやりと笑っていた。

＊9.1 T 作文

今日の朝は洗濯をしたりしました。そして、午前中は礼拝でした。今日の司会（司式）は、校長先生でして、始めは、聖書でローマ人の手紙十三書の四、からでした。これは少し途中の所で読んだ。それは、しかし、もし、あなたが悪事を行う者に対しては怒りを持って報いで有る。だから、ただ怒りを、いかりをのがれるためではなく良心のためにも従うべきである。これはなんか楽山寮の人につながる用（様）な感じがしました。そして、聖書の後に少し話が有りました。それは三百年も前にイギリスにあるそれは、ウエスミトスア小学校がそこにある。ここの小学校はもっとも、小さい内から、入り、親からも、はなれて、くらしている。この小学校は、ロンドンにあると言った。その内に、この小学校でニクラスと言ういたずらっこがいてある男の子をブンナグッタ。そして、机の回りとか色々回っていました。すると、ニクラスは、カーテンの所にまたがって、五十センチぐらいやぶけました。すると廊下の方から、先生の来る足音がしました。皆なはしずまり、もっとも前の自習をしている態度が違う。先生はカーテンを見てカーテンをやぶった人はだれだと言った。先生は、何回言っても出てこない、先生は出てくるのを、きたいしていました。でもだれも出てこなかった。先生はそこで考えました。1 人 1 人カーテンをやぶった人を聞いて見ました。後、ニクラスとウエクしかのこってはいない、ウエクは心でニクラスに言え言えと、心で思っていました。でもとうとう言わなかった。そして、先生がニクラスと言った。ニクラスは僕ではないと言った。後はウエクしか残っていない、ウエクは、家庭学校でも同じく、委員長にウエクが皆にえらばれた。でも、ウエクは、ニクラスの罪を持った。先生はむちを持ってはたいた。そこで、三十年たち、裁判がおこない、ともにニクラスとウエクが顔を合わした。ところが、ウエクがしけいになりました。そこで、ニクラスはウエクをたすけてこの町で一番早い馬車を持って、ロンドンにげていったと言った。

9.21

午後から K、T、S、S、H など、比較的小さい者に草刈りを言いつけ、その後に自由にグランドで遊ばせている時に来客を案内しての谷先生がグランドに行ったらしく、グランドに来てから去るまでの様子を描いての T の日記が楽しい。

特にみずみずしい表現は、

〜〜〜行った時はせーせーしました。

という末尾の言葉である。こんなにもさっぱりと自分の気持を文章に表現できる少年らしさを、いつ迄も大切にしたい。

＊9.21 T 作文

今日は、午前中又音楽の練習をしました。そして礼拝堂へ行って、少し裏の小屋の中を色々と片付ずけそこの中から家の中に入って、やると言った。日曜日には、リハーサルするとか言っていた。午後からは、寮で彫刻の残っている人は全部しあげをしれと言った。そしてたいてい小さい人六人で、桂林寮の草刈りをしました。とても時間がかかった。皆なは、あまり、パキパキとしなかった。その後終わって、グランドで遊んでいれと言われた。僕たちは、ソフトボールをしていた。その時校長先生と、お客さんがきて、とても恥ずかしかった。でも平気でやっていました。行った時はとてもせせしました。

11.24

今日の礼拝司会（司式）は谷先生だったが、谷先生の話をしっかり受けとめて書いている T の日記が光っている。午後はほとんど体育館で遊んでの 1 日だった。

＊11.24T 作文

今日は、朝は、八時に起きました。僕は、ゲンカンをしました。便所は M 君がしました。だいたい五十分ぐらいで終わりました。●●●●（４字不明）掃除おしました。午前中は礼拝です。司会（司式）は校長先生でした。今日の話しは、最初に、賛美歌を歌ったけれども最後の方と、聖書見たい物を話してくれました。その後話しは、ある国にダビデと言う王様がいた。そして、その王の中実のケライがいてそれは、ウルテと言うケライです。そのケライにはとてもきれいな、奥さんがいました。その王様はまちがった事をしてしまって、王様はそのケライの奥さんに、言おとして、その一人の男のナノニニと言う人は、とてもマガッたことがとてもきらいで何んでも言方です。だから王様は、あやまった。もう一人は、最大な危機言う事です。それはまちがっ時に自分自心はどうするかと言う事です。人生の、わかれ道である。これをけいけんの問題である。一回まちがっいる、でも自分は立ちなをろうとして、行けばいいと思います。だからもう一回人生をあゆみ、まちがった事を、も一回、始めからやりなおして行けばいいと思います。それともう一つは、ダメと言う言葉です。一人の人間はもう自分はダメだと決めつけている。一千人もいる所であなたわ、ダメだから、やめた方がいいと思うそれに自分はダメだと思わずいると、絶対に、しっぱいはしないと思います。

1975

5.9

朗読会に出場。

「母の思い出」

11 日は母の日、今日の朗読会は特にそのことを意識しない自由な作文朗読とする。

T は夕べからせっせと「母の思い出」と題して作文を書き、今日は少しためらいを見せつつ低い声で読み終える。

講評は花島先生、最後に谷校長先生も講評して下さったのだが

～～ T 君の作文を聞いて、こんなにもつらく悲しい作文の朗読に、私は拍手していいのかどうか迷いました ～～

という谷先生の講評に対しての、T の日記での反応が面白い。

＊5.9T 作文

今日は、午前中は、朗読会でした。今日石上館では、僕が出ることになりました。日曜日は、母の日なので、それに、いどんで、僕は、母の思い出と書いた。自分では、あまり、文章は、続けて、うまく書けないので、少し変に行った。僕は、今日朗読会に出る時は、すぐ、緊張してしまいました。でも僕は、何年間という物を過して来たので新入生に負けづ読みたいと思った。I 君が読み終わった突然いやな気持でしたけれども、あそこに立って、読んで見ると、心がとても、さっぱりしました。今まで、ゆらゆらしていた。気持が自然となくなってしまった。僕は、母の思い出と言えば、有まりきおくには、のこってはいません。少しわかるかる(ママ)が、後全部父さんから教えてもらいました。講評は、花島先生です。有まり、説明は、わからなかった。校長先生は、かなしい時に、はくしゅをしていいのか普通ならするか、かなしい作文の時は、はくしゅは、なるべくしない方がいいと言った。そして、平和寮の I 君の作文がいかった。僕は、さすが花島教室だと思った。文章がすごくととのっていました。平本先生が、I 君がちょど一年前に、高校に行くと言ったので、それがおちてしまって、母からの、はげましの手紙をくれて、読んでくれました。今日は、母と言う題が三人も出た。そして、H 君の作文は、母に対して、お金をもらわないと手伝おしない。H 君は、一回無外おして、田中先生がむかえに行って、もう無断外出は、しないと、思って、H 君と、あくしゅおしました。その中に先生の、ぬくもりが H 君に、つうじたと思う。今日は、だいたいこのようなことで、とても皆な一人一人いい作文でありました。

5.11

今日は母の日、谷先生の淳々としたお話の中にこめられた「愛」は皆に深い感銘を与いた様である。T は 1 昨日の朗読会に母の思い出を書いたあとだけに、尚更考いさせられていた様である。

*5.11 T 作文

今日は、朝は、本当は、部屋掃除でしたが S 君にかわって、僕は、外作業に行って、ハウスの中の水掛をしました。風呂の水を使って掛けました。そして、ハウスの横の、魚箱とか片付けました。今日の司会は、谷先生でした。聖書の中で少し初めと最後の言葉の中で書いていた事は、イエスは、その母と愛弟子とがそばに立っているのをごらんになって、母に言われた。「婦人よ、ごらんなさい、これはあなたの子です。」それから弟子に言われた。「ごらんなさい、これはあなたの母です。」その時以来、この弟子は、イエスの母を自分の家に引き取った。そして、だいたいこのような事を書いておりました。話しは、1906 年に一人の女の子の母が死になくなった。1907 年にちょうど今ごろ母は死んでしまった。だから、その年に、その女の子が家にあつまり、母の思い出話をしようと決めました。その皆んなは、楽しそうに、母の思い出話をしている時に、家の片すみで一人の女の子が、しょんぼりすわっていた。皆んなそれに気がつき行ってみるとその人は、生まれてから、まもなく母は死んでしまったと言う事です。その女の人はなんて言ったかというと、「ただ母がいなくても、生まれて来てとても幸せです。」と言った。これはアメリカの方で、5 月第二日目の日曜日に母の日と決めました。これは法律できめられたと言った。そして、もう一つの話しをかんたんに書くと、パーヴェルトと言う人が、社会運動家になりこれを一つ二つやっていると、「けいさつにつかまりますよ」と母が言った。やっぱりパーヴェルトはつかまってしまいました。そして、母の日は、カーネーションと言って、生きている母には、赤いカーネーション、いない人には、白いカーネーションをわたすと言った。

11.16

今日の礼拝は谷先生、10 日間に及んだ寮学習のしめくくりとして話して下さったのだが、T の理解は

流石である。
午後から車でやって来た T.S.(**54)の母さんをちらっと見ていた T だったが、なんの感情も見せないいつもの様な淡々とした表情だった。
この T の表情を無感動 無表情 無愛想などと一言で表現するのはたやすいが、その底にある感情の起伏を読みとることは容易なことではない。

＊11.16T 作文
今日の話しは、今週約、二週間、寮学習や、寮作業があったと思います。毎月、五日八日は、平和山に、登る事になっています。それから、今まで、寮毎となっていました。本当は、普通の、人達は、ちゃんと、学校に行っていますが、私し達も行かないとならない。これは普通の生活では、ありません。何故かと言うと、色々あります。そして、人間と言う物は、時々立ち止る時があります。そして、人生を歩いて見て、時たま、立ち止る時もあります。それは、今自分は正しい方向に向って歩いているのか。あるいは、ちがった事で、何にかを考えているのか。わからない。私し達は、一回、九月に入ってから、一群会を、開いた事があります。その時私し達は、努力目標を、たてたはずだ。それは、無断外出をなくしょう。そして、陰、日向のない生活をするって、皆んなで、きめたはずだ。それを皆んなが、破った。これが、破る前は、一群会の三約の人が、その時、きめた時から、すぐ、このポスターを、書いて、各教室とかに、色々はった。でも、それを見てある、一人の先生が、校長先生の所へ行き、これを見て、はずかしくは、ないのですか。と言った。でも、はってはいいけないのでは、ありませんか。と言って来た。だけども、この家庭学校には、お客さんが、いっぱい来て、私しが色々と、校内を、案内します。そして、もちろん学校の中も、見てもらいます。そしたら、お客さんは、このポスターを見て、どの様の、感じるか。きっと恥かしいと思と思います。でも、私は、恥かしくはないと思う。きちんと、自分の欠点を、正直に、話しているかる、何にも恥づかしくはないと思います。そして、見えぱりがあるから恥かしいと思う。何んも、そ言う事がなければ、恥かしくは、ないと思います。そして、色々と、自分の過去の事はあったけれども、過去という者は、書きかえることは、出来ないけど、未来わ、自分の決心で、かえることが出来ると思います。それに聖書と書いているとおり、狭い間からはれ、滅びにいたる間は大きく、その道は広いそして、そこから、いって行く者が多い。命にいたる間は狭く、その道は細い、そして、それを見い出す者が少ない、と聖書の中でも書いてある、通りです。この話しもきっとそうだと思います。

1976
1.11
今日の礼拝は谷先生、愛についての感銘深いお話をうかがう。
しきりにメモしていただけに、T の日記は実にきちんと谷先生のお話を伝いていて、僕も更に学ぶものがあった。

＊1.11T 作文
　今日読んだ聖書は、愛と言う事について、ポーロという人が書いた事で良く愛の無い人生は地獄見たいな物です。小さい時から苦労していると言われているけど、愛された事の無い事は、びん乏などの苦労よりもっとつらい苦労で有る。他の人が自分を愛しているという事がわかればとっても嬉しい事です。皆んなは、物を食べて育つけど、愛と言うのは心の食べもので育つ事だと思います。皆んなわ誰れを愛したい。誰かに愛されたいと言う。気持を持っている、持っていないと言う人は嘘だと思う。この中には、男と言う愛がある。僕達は、おしゃれをするけど、この事と結びつくんじゃないかと思う。おなじ、おしゃれをする子の場合、皆んな、愛したい、愛さ

れたいと言う気持ちがあるからです。人間には、愛と言う大きなのぞみがある。人間には、どう言う愛があるかと言うことを今日読んだ、ローマ人の話に書いてある、愛は、いつわりが有ってはいけないと思います。本物でなければならない。ゴマすったり、とりいったり、俺が目をかけてやるから、俺の子分になれと言うように見かけだけでは、いけないと思います。愛するからには、心から本当に、愛しなければならない。新の愛の中には子供をだめにする、愛もある。これは何でもいいよいいよと許してしまって、●(1 字不明)子の様に育って行く。昔から親は子をしっかり育てないとだめだと言われる。やがて僕達が大きくなって、女の人と一緒にくらしていくようになると思います。本当の愛と言うのは、男と女が協力し合って、とても良い家庭をつくって、生きて行くって、しっかり生きて、行くと言うのが本当の愛だと思います。家庭学校では、キリスト教の学校であると言う事です。今日は、この用（様）なことを、今日、校長先生が話してくれました。僕は、今まで、この様な、話しをきいた、とても、勉強になったのでは、ないかなと思います。そして、今日も聖書を、聞いて、又は読んで見て、愛と言うものはこう言うものだなと思った。そして、色々と、聖書の中から、愛と言う言葉がつかわれていますが、とても良いことだと思います。　　終わり

6.13

今日の礼拝は谷先生、「人を許す」ことの大切さを淳々と話して感銘深い礼拝だった。

T は、

「やっぱり誰れしも人を許すと言うものは、とうてい出来ないものです。一言ですめば、何年もその人をにくんでは、又心のすみにゆるされない事もある人もいると思います。理想であるキリストの教えの中では色々あると思います。やっぱりキリストの教えと言うものは正しいと僕は思います。　」

と書いているが、T の使うやっぱりという言葉を面白いと思う。

＊6.13 T 作文

礼拝の感想文　司会（司式）　校長先生　S　今日の午前中は礼拝でした。今日の話しは、一番最初に聖書を読んでこの中の意味をといてくれました。よくよく考えて見ると聖書と言う者は、僕達は、毎日読んでいますがこの読んだことを一日も早く学んでほしいと言うことです。話しは変わって、この学校は、大正三年に出来た学校です。この家庭学校は、大正三年に出来たのだけどもっと早くこの礼拝堂が建てられたそうです。だから毎週日曜日になると僕達はこの礼拝堂へ来て、礼拝をするのです、やっぱり誰れしも人を許すと言うものは、とてい出来ないものです。一言がすめば何年もその人をにくんでは、又心のすみにゆるされない事もある人もいると思います。理想であるキリストの教えの中では色々あると思います。やっぱりキリストの教えと言うものは正しいと僕は思います。次々と話しは変わりますが谷先生の知っている人であまり親しい人ではなくて、その人が何回か手紙を出すようになり少し親しくなったと言う事です　その人は谷先生の友達で谷先生はあまりつきあっていなかったそうです。その谷先生の友達の仲の子供が生まれてからその女の人がおとうとをにくく思っていた。その五才になる弟を色々今までにくく思っていた弟をいじめていたりしました。弟の一番最初のお母さんが死んでからその弟をにくみめの姉さんは、何んでこの弟が生れのかと、姉さんはなやんでいたりしました。それから少したってから死んだお父さんがのこして行った日記を姉さんが見て新しいお母さんをにくんでいた。それから姉さんが毎日お父さんの日記をぱらぱらと見ていた。そのことを思うと弟が可哀想に思いました。今日は、とびとびの話しだったけど、谷先生はこのようなことを話してくれました。僕もあまり今日の話しはあまり意味がとれませんでした。

12.12

発信　H さんへ
（11 月実習生）
今日の礼拝は谷先生、マタイによる福音書について説きつつ、人間の生き方について淳々と話して下さっての感銘深い礼拝だった。
T は
「からっぽの人間はいつも偉ばっている、この様な事を話してくれました。」
と、谷先生のお話しの核心をきちんと受けとめている。

＊12.12　T 作文
礼拝の感想文
今日の午前中は、礼拝で司会（司式）は、谷先生でした。今日の話しは、マタイによる福音書、二節、二十章でした。話しは、ゼベダイの子の母ガイエスの所に近よって来て、又子も一諸につれて来た。その時母は、この二人の息子がイエスの御国で、一人はあなたと左に、もう一人は右にすわらすようにイエスに願った。所がイエスは、あなたがたわ、自分が何を求めているのかわかっていない、又、イエスののもうとしている林を飲む事が出来るか又、その二人の子が出来ますと言った。又イエスは、彼に言われ、確かに、あなたがたわ、わたしの林を飲ことになろう。この様な事をイエスは言ったそうだ。けれど、今日校長先生も言わ人れた通り、最初新入りの者は、そう気やすく偉ばる事は出来ないけれど、年期(先輩格の意―河原注)になるつれてずんずん偉ばって来る。又。この様な、年期は、下っぱのする事をしなければならないのです。人の地に行った人が偉ばっているが、私しのそばにいる人はちがう。又、かしらになる人はしもべにならなければならない。又年気になれば人一倍にならなければならぬ。私の仲間で偉くなっていると言う事はならない。からっぽの人間はいつも偉ばっている。この様なことを話してくれました。そしてこないだ私しの所に一人の少年がやって来た。話しを聞くと、この学校に来てずんずん悪くなったと言う事です。又その話しを聞いてびっくりし話しを聞いてみると、このごろは圧力をかけて見たりするのが多く、又新入生で入った時はこの様な事はなかったのです。又自分は、悪くわないけど、年期になれば、このようたちばになったと言う事です。

1977
1.9
今年最初の礼拝、谷先生のお話について T は、厳しく受けとめている。
僕は R の病院に行って留守だったのだが、谷先生のお話の内容と T の日記の違いがたしかにある筈と考えこんでいるのだ。
谷先生からいつかゆっくりおうかがいしたいと思う。

*1.9 T 作文
　今日の司会は、校長先生でした。一時帰省から帰って来て、今回初めての日曜礼拝をおこないました。まず今日の話しは、一時帰省の事を話してくれた。一時帰省から帰ってくると、人それぞれ何か希望を持ってこの家庭学校に来るのですが、どこか心のかたすみにまだ家にいたいと言う気持を持っている人がいるかもわからないと言う事です。家にいると自分一人では何もやらなくてもいいし、自分一人で、楽が出来る。それに又昔の友達もいるし、そのようなどこか心のかたすみにその様な気持を持っていると言う事はうまくないと言う事です。やっぱり皆んなはこの家庭学校に来た以上は、学ぶ事は沢山あるし、その学んだ事を社会に出ていかせてやれば何とかうまく行くと言うような事を話してくれました。そして一時帰省で残っている人達で書きぞめをしたのだけれ

ど、校長先生の書いたので、性相近習相遠いと言う書ぞめをした。この意味は、人間が生まれた時には、皆んな同じだと言う事です。でも中国の人で、コウシと言う人がいて、この人は反対をしたそうです。反対と言うのは、校長先生が書きぞめで書かれた事は、間違っていると言う事です。何故まちがっているかと言うと、人間生まれて、オギャーと言った時に、もうすでに人間は違うそうです。それは金持の所に生まれたり、又、社長の子供に生まれたりする。それにくらべて、まずしい家の人の所に生まれたりする。大分差がありすぎる、もし金持の所に生まれれば、それぞれ、ぜいたくなくらしばっかりで、高校にいくのにしても、お金さえはらえば行ける。けれど、まずしい人の家に生まれた人は、お金もなければそれだけ高校に入るのにもおくれ、色々と苦労するのですが、それは大分遅れる、差があり、勉強も大分差がついているから、人間が生まれてオギャーと言ってからもうすでに、人間は、大分違うと言う事です。

1.13
今日は
○ 2 学期成績発表
○ 1 学期始業式
昨日決定した様に T は作業賞を受賞したのだが、それよりも T には、谷校長が 1 人 1 人にじっくりと語りかけて下さった言葉の、自分に対しての言葉にはっと考えさせられた様だ。
寮長の僕がしみじみ頷く程に、今日の谷先生の 1 人 1 人の生徒に対する言葉は、適切、かつ暖かい励しに満ちて、T と僕共々に深く感動しての始業式だった。
T の日記、
「校長先生は、あまり知らないのではないかと思っていたら自分の事については実にその通りです。僕自身何かがたりないのです。」
T にたりないもの？
〇てきぱきとした言葉と行動
〇もちょっと鮮明な自己主張
〇陽気さ
〇他児を引っぱっていく覇気
しかし、よく考えて見れば、今の T にこれだけ加わったら大変な人格者になってしまうなあと、今のままの T でいいのではないかとやっぱり考えこんでしまうのだ。
〇3 学期の理事　　T(別の寮生―河原注)
（寮長の指名）
〇T は 3 学期も
〇花島学級（再）
〇木工部　（再）
さあ今日から 3 学期、そして T の最後の学期！頑張れよ。
有終の美という言葉があるんだよ！
T。

＊1.13T 作文
今日は、第二学期成績発表と及びに第三学年始業式をやりました。賞を対象にする話は、花島先生が話してくれました。花島先生の話した事は、三つの事を話してくれた。三つと言えば、学業賞、作業賞、努力賞と言う賞の

意味を話してくれた。学業賞は、おもに先生に対する言葉使いとか、町からわざわざ来てくれた先生に対する事、又は態度はどうで色々と表すことが出来る。たとえば、担任の先生がいる場合と新しい先生に対する態度とか特にこの様な事は、賞の対象からはずれるパターンが多いと思う。又勉強時間にケシゴムを投げたり、又エンピツを歯でかじったりして、その勉強道具の使用管理が悪ければ賞の対象にはならない。もっもと意欲があればそれだけ落ちつきも出てくるし、又態度も良くなりそう言うものは、賞の対象に入ると言う事を話してくれました。次は、努力賞の意味は、努力賞は、寮での生活態度だと思う。仲には、リーダーを取りながら行動する人もいると思います。リーダーと言う役目は本当にむずかしいものだと思います。仲々まとまらないとすぐ腹をたてたりしてすぐおこったりする。こんなのはリーダーと言えません。寮では色々と小さい人の面倒を見たり又、色々小さい人をかわいがったりする。又、自由時間でもただぼうぜんとテレビを見たりするのではなくて、こう言う事はよく斉藤先生が一群会で話す時があるけれど、自由時間でも自分から何かを見つけだしてその日を暮らす。それが本当の生活だと思う。今はテレビがあって何も不便することはありませんが、寮の中での一つの責任感、この様なものが一つになればこそ、本当の努力賞と言うものが取れるのではないかと思います。最後に作業賞については、もっとも一番大事なものは、持久力だと思います。毎日その仕事にいつまでも長つづきするようになれば良いと思います。一つの仕事に取りつくと言う事は少しむずかしい事ですが、そこをなんとかやりとげてこそ本当だと思います。でも仕事はよくするのですが道具の使用管理が悪い事、これも少し気をくばってやればちゃんと出来ると思います。これが出来ればちゃんと作業賞はとれると思います。この様な事を花島先生が話してくれました。次に校長先生が話してくれた事は、桂林寮の方から一人一人について、話しをしてくれたのですが、石上館で話してくれた事はまず最初に僕からでくわしく話してくれた。それは自分もこの家庭学校にもう五年一ヶ月となる長い年月だが、やっぱり人それぞれその人の持っている個性と言うものがよくわかる。実に校長先生は、あまり知らないのではないかと思っていたら、実にその通りです。僕自身何かが足りないのです。一応そこまでやり通してきたのですが、後わずかもう少しのこっているのですが、その、のこっているのをほっぽり出して、途中半ぱでやめだす感じ。後もうひといきなのですが何か何かがたりないと話してくれた。校長先生は、僕は五年一ヶ月いるのですが、僕も年期だし、作業班の斉藤先生が僕なら仕事を安心でまかしておけると言われた時少し嬉しく思った。校長先生は僕に対してこの様な事を話してくれた。後は、石上館で他の人は、T(別の寮生**54)は、めいろうで明るくすなおな子ですが、先生たちから見れば、僕達から見れば大分ちがうと言う事です。僕達とくらしているとT(別の寮生**54)は、はんぱつですぐおこる。そこをなんとかほりさげてほしいと言う事です。A（寮生56）は、校長先生と一諸に旭川の相談所に行った時、A君の母さんが色々とA君について話しをしてくれるのですが、A君は、恥ずかしそうに下を向いてまっ赤な顔をしている。だから、もう少し自分の心に自信をもって、せいせいどうどうと。まえむきになる様になってほしいと言う事を話してくれた

1.30
今日の礼拝は谷先生、放蕩息子のたとえ話を語りつつ、人間の生き方を淳々と説いて下さっての感慨深い礼拝だった。
Tは、
「校長先生わ今日僕達にかんれんする話をしてくれたと思います。」
と日記に書いているが、残り少なくなっていく日を意識してか、T の１日１日の中に今迄感じられなかった感傷が感じられて来て、改めてTの真面目さを僕で感じている。
5年も過ぎたというのに、益々僕はTが好きになっていく。

＊1.30　T作文

河原国男

今日の司会（司式）は、校長先生でした。最初に、内容わ、放蕩息子の譬え話しをしてくれた。イエスはデシ達に譬え話しを言った。どうかデシ達にわからそうとした。又デシ達にも色々な話をしたのだけれど、イエスは、このデシ達にどうか学校のいる間、又イエスの所にいる間は、なんとかわからせようと話しをしました。この放蕩息子と言う人は金持ちだった。その家には、兄、第とがいて、もう 1 人父がいた。弟とは、ある日父に言った。財産はこの家にどのくらいあると言った。父は山もあるし、又土地もいっぱいある。又、色々と山とかうれば相当な金になると言った。弟は、父が死んだらどうせ財産は皆んな、兄と弟の方へ来るかもわからない。けれど父が死と言ったら、まだ十年、二十年もの先です。弟は今すぐその財産を少しわけてもらいたいと言った。父は心の中でとてもふく雑な気持したけれど少し財産を分けてやりました。お金ししれば約三千万円ぐらいになる。弟はさっさとその財産をあるだっけもって都に行った。弟の気持の中では、都に行ったら自分は偉らい人になるんだぞと言う気持を持っていたのかも分からない、都についてからはその財産をあるっだけ使いはたした。たまには皆んなにからかわれた時もある。けれど弟は財産を全部使ったために残りませんでした。その時は本当に困った。ある日弟は、農家の人にやとってもらえて、ぶたのせわをしたそうです。その時ぶたにえさをやり自分は、その時すごく腹がへっていたのでそのぶたの食べているへさまで手がとどきそうでしたが、その時自分がどんなにみじめだがよく分りました。ある日弟はさっさと家に帰り、父は本当に弟わ分ってもらえたのだって暖たかくむかえてやったのですが、兄だけが本当につめたい目で見た。色々と初めから最後の事をふりしぼりながら冷たい目で見た。校長先生わ今日僕達に、かんれんする話しをしてくれたと思います。　終り。

2.20
朗読会出場
「卒業を前にして」
T もきっとそうだったと思うし、僕もそうだった T の夢にまで見た卒業朗読、淡々と読んでいた T の見事なまでの成長ぶりに目頭を熱くしたのだった。講評をして下さった加藤先生、谷校長先生にはただただ感謝でいっぱいである。

谷校長先生
「T 君はいよいよ出番を迎いたのです。5 年 2 ヶ月の家庭学校での生活をもう少しで終えて、自分の出番を迎いるのです。頑張って下さい。」

加藤先生
「なあ　T、あんなに小さかった T がこれだけ立派になって卒業できる様になったのは大したことだと思うぞ！
5 年 2 ヶ月これだけ頑張って来たんだ！
社会に出ても T なら大丈夫だと思う。
頑張れよ！」
有難度うございます　両先生。

＊2.20 T 作文
「卒業を前にして
僕は、この家庭学校に来たのは、昭和四六年、一二月一日です。自分はまだ小さく小学四年生の頃でした。一二月と言えばもう正月の一時帰省が近く、僕は桂林寮におせわになった。色々と加藤先生が僕に面倒を見てくれた

りしました。自分はこの家庭学校に慣れるため一生懸命努力をしたつもりですがさすが生活も厳しく自分わこれ以上たえられないと思ったけれど、勉強にも作業にも又寮生活でも頑張った。自分は家にいた頃はとても毎日夜おそく帰って来ては、おこられ又、たまあにまちがいなどがいくつかありましたが自分はその頃は大変複雑な気持でしたがこの家庭学校に来て、自分では大変良かったと思います。力もつけたし又、自分なりの勉強だど思います。大変今では、やっぱりこれから自分のためにもっと力を入れて行かないとならないと思う僕は、小学六年、中学一年頃は早く卒業したいなと言う気持でしたが、よく卒業生は、卒業する前まだこの学校にいたいなと言っている。僕もその気持わよくわかるけれど、やはり、この家庭学校よりも社会の方がうんと厳しいと言われています。僕もその通りだと思います。自分はこの家庭学校に来て、やる事はやっていると自分なりにそう思うのですが、藤田先生にも又、この間の績成発表の時に校長先生から何か一つ物のたりないと言う事です。自分もその物たりなさがなんなのかわからない。けれどその物たりなさが、自分でもわからないけれど一日の生活で一生懸命やれば、何んでも出来ると思います。そのため今は、自分はこの朗読文で卒業前にしてとう題で読んでいますが、やっぱり自分はもう少しで卒業出来るからって、今日の生活に気まぐれにすごすのではなく、やっぱり毎日これから雪像でスキー大会でも頑張って行かないとならないと思う。今でも自分わ卒業するのにわ、まだ物たりないと言う感じがするのだけれども、社会に出るまではもう少し頑張りたいと思う。去年は、一、二度自分は、事件を、おこしてしまい理事と言う大きな役員をパーにしてしまい大変今でも失配したように感じますがやっぱり学校全対をリードスすると言う事は大変むずかしい事だし、僕一人は、とうていむずかしい事ですが、皆んで力を合わせてやって行かないと、良い学校が出来ないと思いました。これからの自分の仕事は、やっぱり社会に出ても、人一ばいに働いて、すぐ仕事に出られる様にじゅんびしておくと言うこの事はいつも先生は石上館の皆に言う僕ももう少しその様な事を心がけておかないとならないと思います。又、家の人にもあれこれと心配をかけたりしたしけっきょく自分はこれから一人で独立して行かないとならないのです。たえづ今は、あまりじしんはありませんが社会に出て、色々と、変な人にさそわれたり又そんな事などに負けづ一生懸命頑張って行くつもりです。そして、僕はもう五年と二ヶ月になりましたがその間僕より新入生で入って来た人がぞくぞく卒業したりします。大変僕より新入生の人が卒業して、うらやましく思ったが今思いつめて、自分が卒業前にしてと読んでいますが。何んか五年と言う日々がパット来ような感じです又、この家庭学校の一番年期と言う事ですが、日々は大変早く感じました。この学校に、こんなに長くいたのだから、社会で就職し又職場についても、この家庭学校に長くいたように、三年ぐらいわ、希望もっていなとならないと思う。多少つらい事があるかもわからない。けれどそのつらいかべにぶつかって行けば、一人前の社会人になると思うし自分はそう願っています。多少つらくてもがまんし、それが何回も何回もくりかさなるにつれて、自分と言うものが身出せると思います。

3.13

今日の礼拝は谷校長先生、卒業即自由という考い方の危険な錯誤について淳々と話して下さっての感慨深いお話しに、特にTとSは深い感銘を受けた様である。

「今日の谷先生の話しは、とても大事な話だと思っています。」

ほんとだぞT！

5年3ヶ月、260枚以上書き続けて来た礼拝感想文の最後の一枚が谷先生の深い示唆にみちたお話しで終わったことに、今更に深い感謝の思いでいっぱいである。

礼拝が終わった後、20年前の卒業生Hさん（帯広で建築業）が、

「家庭学校に居るうちにうんと勉強して下さい」

と簡潔な言葉の中に千金の重みを感じさせての挨拶があり、その後、楽山寮のO君の卒業の挨拶に次いでTも挨拶する。

「5 年 3 ヶ月ここで学んだことを社会に出てからやり通します。
皆さんも頑張って下さい。」
なんとも言いない気持でじっと聴く。
〇午後は洗濯をした後の自分のベッドを整理し、夕方、S と 2 人で各先生に挨拶廻りに行って来る。
帰った後の目頭がにじんでいたのは涙だったのかも知れないなあ〜〜。
〇夜、T と S の送別会をする。
あんまり感傷的な雰囲気になってしまったら辛くなる気がして、コーラを飲みながら、昔の石上館の話などをしてできるだけさりげないかたちの送別会にしたのだった。
いよいよ今夜で最後、T の転出証明を見せながら、
「明日からは札幌の市民になるんだぞ！
　札幌の人口は 1 人ふえるんだ！」
と言ったら、
「札幌の人になるのかい僕も！」
とびっくりしていた眼の輝きが印象的だった。

＊3.13　T 日記「寮回りについて」
僕は、自分が明日卒業すぐから寮回りに S 君と一緒に行った。各一人一人の先生わ、僕達に、そのはげましの言葉によって、又家庭学校の名誉にかけて、一生懸命やって行きたいと決心した。やっぱり先生方におわかれのあいさつをすると言う事は、本当につらい事だと思いました。僕はやっぱりこの家庭学校の先生方に感謝しなければならないと思う。多くの人を寮回りにつきそった事があったけれど、今回は自分と言うものをにぎりしめて今日の寮回りに行きました。長い事この石上館にすみなれたかと言うか、小さい頃からこの学校に来て、本当に自分の家の様にして、くらして来た。やっぱり、僕もこの学校に先生方と友にくらし、又、先生方のきたいを裏切らない方が自分のためかもわからない。けっきょく社会出て自由を求めて行った言うか、しっぱいしている卒業生わ多いと聞かされ、りっぱな社会人とすだって行きたいのです。でも自分の道はこれからです。くじけずに頑張りたい。

＊3.13　T 作文
今日の谷先生の話しわ、とても大事な話しだと思います。春がちゃくちゃくと近ついて来ている。春が来るとこの家庭学校からすだって行く人が多いのですが、これからおもに卒業すると言う人のために話しをしたい。この学校を卒業したら、多分さきに自由を求めるはづだと思。でも自由と言ったて、そう簡単につかめるものではないと思う。自由と言うものは、免許を取って、自働車を運転する事だと思います。でも免許を取らないで、車のそうさとかも知らないで、その車に乗って、百メートルさきスイスイ行けないものではない。自由に生きるためには、やっぱり修業して力をたくわえて行かないと自由は求められないと思います。今は、この学校にいて、色々と先生方に修業を受けていますが、社会に出たらこれから何でも一人でやって行かないとならないと思います。今日卒業生も言ったけれど、ここにいるうちは、やっぱり勉強をいっぱいしておかなければならないと思います。社会に始ると、それだけ厳しい事はよくわかるし、それに、一応修業をちゃんと受けてから自由を求められないと思います。今日校長先生の言わんとした事は、やっぱり社会に出てよくよく自分の事を修業したり、何回も苦労を受けてこそ、本当の自由を求められると思います。社会に出ると、いつつかの、苦労があるけれど、その苦労にぶつかりながらも自分の事だけを毎日勉強して、そして、修業してこそ、本当の自由と言うものが求められると思います。やっぱりそのため自分は、これから一生懸命頑張らないとならないしそう言った、苦労、又、今

日校長先生が話してくれた事は、やっぱりいつまでもわすれない方が良いと思います。

以上のように、一人の寮生についての日誌から、谷校長の講話に言及した部分を明らかにできる。講話内容に対する寮生自身のうけとめそれ自身が興味深い。講話の内容を克明に細大もらさず書きとろうとしている状況がうかがえる。藤田も、その点にしばしば賛嘆している。誤字、当て字が少なくないことなど―藤田の意識では、この寮生に限らないことだが―末梢的な事柄に過ぎない。「卒業を前にして」の長文が示すように、その時々の、あるいは常日頃抱いている思いを実直に、表出できているかどうかが藤田において重要である。こうした書きぶりを含めて、この寮生に対して、藤田はどうむきあったか。一見、「無愛想」とも「淡々とした表情」にもかかわらず、「確かな」理解を示し、対話的コミュニケーションと呼ぶべき足跡がここにも見られるとすれば、どのような特質を示していたか、という点も注意されるだろう。けれども、本稿では、寮生は仲介者にとどまる。講話する谷校長に対して、藤田がどう応答していかを分析する。この点で三つの形が着目できるだろう。
1)主に理念の提示として藤田がうけとめている場合。
2)寮生の状況そのものに寄り添い、むき合っていると藤田がうけとめている場合。
3)上記 1）2）の中間。当の寮生に即して理念が提示されていると藤田がうけとめている場合。

1）理念の提示
・「礼拝堂」という講堂で谷は、家庭学校全体の寮生全体にむき合って講話した。そのおり、しばしば聖書をはじめとする古典等から、講話の主題を選びとっていた。「マタイ伝」（1973.12.16）、「パスカルのパンセ] (1974.2.3)、「独立の人」(1974.4.5)、「愛について」(1975.5.11)、「人を許すこと」(1976.6.13)、「愛について」（1976.1.11）、「人間の生き方」（1977.1.30）、「自由」（1977.3.11）などがそうである。これらは、理念そのものである。それらの理念をさまざまに寮生がうけとめていることを藤田は記している。その点について、以下列記しよう。
1.「マタイ伝 14 章 24 節から 33 節までのお話を中心に、含蓄の深いお話だったが、T の日記の末尾〜でもよくイエスとかペテロとかが、よく水の上を歩けるなと思った。僕は今でも水の上を歩ければ、とても面白いなあと、今日礼拝の時考えました。でも、そううまくぜったいにいかないなあと僕は思いました。〜
木で鼻をこすった様に無愛想に最前列に座っているが、こんなにも生き生きとした感受性を持って聞いていることを、他の先生も生徒もわからないだろうなあ」（1973.12.16）
2.「今日は母の日、谷先生の淳々としたお話の中にこめられた「愛」は皆に深い感銘を与いた様である。T は 1 昨日の朗読会に母の思い出を書いたあとだけに、尚更考いさせられていた様である。」(1975.5,11)
3.「 愛についての感銘深いお話をうかがう。
しきりにメモしていただけに、T の日記は実にきちんと谷先生のお話を伝いていて、僕も更に学ぶものがあった」（1976.1.11）。
4.「人を許す」ことの大切さを淳々と話して感銘深い礼拝だった。
T は、
「やっぱり誰れしも人を許すと言うものは、とうてい出来ないものです。一言ですめば、何年もその人をにくんでは、又心のすみにゆるされない事もある人もいると思います。
理想であるキリストの教えの中では色々あると思います。
やっぱりキリストの教えと言うものは正しいと僕は思います。　」

と書いているが、T の使うやっぱりという言葉を面白いと思う(1976.6.13)
5.「マタイによる福音書について説きつつ、人間の生き方について淳々と話して下さっての感銘深い礼拝だった。
T は「からっぽの人間はいつも偉ばっている、この様な事を話してくれました。」
と、谷先生のお話しの核心をきちんと受けとめている。」（1976.12.12）

こうした事例が示すように、藤田は谷の話を肯定的に理解している。しばしば「感銘深い」と評している。そのような講話であったが、寮生の理解を藤田は否定せずに、肯定的に好意をもってうけとめている。

2）寮生に寄り添う

理念を提示しているという場合と対比して、谷は、むしろ徹底して一人一人の寮生に即して語りかけている場合がある。その組織的な機会は「礼拝堂」で行われる「朗読会」、年度末での 3 賞受賞式、そして、収穫感謝祭での発表などの機会がある。T 寮生に対しても、そのような場面が見られ、藤田はそれを書き留めている。
１.「最後に谷校長先生も講評して下さったのだが
〜〜　T 君の作文を聞いて、こんなにもつらく悲しい作文の朗読に、私は拍手していいのかどうか迷いました 〜〜
という谷先生の講評に対しての、T の日記での反応が面白い。」（1975.5.9）
2. 昨日決定した様に T は作業賞を受賞したのだが、それよりも T には、谷校長が１人１人にじっくりと語りかけて下さった言葉の、自分に対しての言葉にはっと考えさせられた様だ。
寮長の僕がしみじみ頷く程に、今日の谷先生の１人１人の生徒に対する言葉は、適切、かつ暖かい励しに満ちて、T と僕共々に深く感動しての始業式だった。
T の日記、
「校長先生は、あまり知らないのではないかと思っていたら自分の事については実にその通りです。僕自身何かがたりないのです。」
T にたりないもの？
〇てきぱきとした言葉と行動
〇もちょっと鮮明な自己主張
〇陽気さ
〇他児を引っぱっていく覇気
しかし、よく考えて見れば、今の T にこれだけ加わったら大変な人格者になってしまうなあと、今のままの T でいいのではないかとやっぱり考えこんでしまうのだ。」（1977.1.13）

谷校長のことばを「適切、かつ暖かい励しに満ち」たものとしてうけとめ、その上で、寮生の「何かが足りない」のではないかという問いかけを、藤田自身もひきとって考えている。
3. 朗読会出場
「卒業を前にして」
「T もきっとそうだったと思うし、僕もそうだった T の夢にまで見た卒業朗読、淡々と読んでいた T の見事なまでの成長ぶりに目頭を熱くしたのだった。
講評をして下さった加藤先生、谷校長先生にはただただ感謝でいっぱいである。

谷校長先生
「T 君はいよいよ出番を迎いたのです。5 年 2 ヶ月の家庭学校での生活をもう少しで終えて、自分の出番を迎いるのです。頑張って下さい。」
加藤先生
「なあ　T、あんなに小さかった T がこれだけ立派になって卒業できる様になったのは大したことだと思うぞ！　5 年 2 ヶ月これだけ頑張って来たんだ！社会に出ても T なら大丈夫だと思う。
頑張れよ！」
有難度うございます　両先生。(2.20」

校長先生から指摘された「物足りなさが、自分でもわからないけれど、一日の生活で一生懸命やれば、何でも出来ると思います」と T は「卒業を前にして」と題した作文で記していた。そのような T の決意を知った上での、藤田の寮生に対する期待であり、谷校長に対する感謝の念が示されている。

3）寮生に即した理念提示
1977 年 3 月 13 日、谷校長は「卒業する諸君に」と題して講話した。そのなかに寮生 T がいた。その内容は『ひとむれ』第 48 巻第 5 号（419 号）、1977 年 4 月 1 に掲載されている 9)。

「諸君の一番ほしいものは自由です。そうではありませんか。…自由とは、運転免許を取って自動車することに似ていると私は思うのです。…一旦免許を取ったとしても、習うよりも慣れると昔から言います。一層運転技術をみがくことによって、運転はいよいよ上達して、文字通り自由自在です。しかし、油断は禁物です。いい気になっている、事故に連なります。…自由とはこうしたものなのです。自由を手に入れることも、自由を維持することも、実は仲々容易無事ではないのです。…自由にしたい。自由になりたい。誰もがそう思い、皆がそう願うのですが、自由と言う事は難しいことだ。私たちは、そのために実力を身につける必要がある修業をする必要がある。…学校を卒業して、世の中に出る。自由になれる。そのように漫然と考えている人は、どうか、このことをよくよく考えて欲しいと思うのです。私は諸君に人生は生涯勉強だ、ということを申すのですが、結局はこういうことに通ずるのです。勉強をして、いろいろな道理が分かり、自分自身にも力がついてくるようになって、はじめて自由にものごとに対処し、さまざまな困難を苦もなく切り抜けることができるようになるのです。…卒業に当って、これからもどうか、一そう努力して下さい。親方に、先輩に、兄弟子に、仲間に、ものを聴いて下さい。」

谷校長は以上のように述べて、昨日、卒業する T 君が家庭学校の長年の「寮回り」の慣例にしたがって「卒業の挨拶に私の家に来てくれ」ていたことにふれた。
こうした講話に対して、当の T はどのようにうけとめたか。以下のように同日作文を記した。「今日校長先生の言わんとした事は、やっぱり社会に出てよくよく自分の事を修業したり、何回も苦労を受けてこそ、本当の自由を求められると思います。社会に出ると、いつつかの、苦労があるけれど、その苦労にぶつかりながらも自分の事だけを毎日勉強して、そして、修業してこそ、本当の自由と言うものが求められると思います。やっぱりそのため自分は、これから一生懸命頑張らないとならないしそう言った、苦労、又、今日校長先生が話してくれた事は、やっぱりいつまでもわすれない方が良いと思います」。

卒業するTは、このように、谷校長の講話の内容を―この最後の機会においても―的確にうけとめている。そのようなTについて、藤田は以下のように記していた。

> 「今日の礼拝は谷校長先生、卒業即自由という考い方の危険な錯誤について淳々と話して下さっての感慨深いお話しに、特にTとSは深い感銘を受けた様である。
> 「今日の谷先生の話しは、とても大事な話だと思っています。」
> ほんとだぞT！
> 5年3ヶ月、260枚以上書き続けて来た礼拝感想文の最後の一枚が谷先生の深い示唆にみちたお話しで終わったことに、今更に深い感謝の思いでいっぱいである。」（3.13）

藤田はこのように、長年にわたる寮生活の事実を不意に踏まえて、平易に「諄々」と語られた谷校長のことばを「深い示唆にみちた」語りとして、うけとめていた。「復学」した寮生に対するTの思いも、この時藤田は思い起したかもしれない。

以上のような形で、谷校長の講話に対する寮長藤田の所見の足跡を辿ることができる。日誌による確認ということでおのずから制約はある。それ以外の日常の場での交流を含めれば、なおいっそう校長とこの寮生との、あるいは、藤田とこの寮生との、対話的コミュニケーションといってよい関係性を質、量ともにゆたかに跡づけられるはずである。それらと密接に関係しつつ、藤田は講話する谷校長に対してどう応答しているか。

藤田日誌以外の残された記録によって、谷校長が、始業式、収穫感謝祭等の全体行事の場面で寮生一人一人について所見を述べて、実によく観察し、励ましていることをわれわれは知ることができる。「寮長の僕がしみじみ頷く程に、今日の谷先生の１人１人の生徒に対する言葉は、適切、かつ暖かい励しに満ちて、Tと僕共々に深く感動しての始業式だった」（1977.1.13）という藤田の記述は、そのことを証言している。藤田と同時代を家庭学校で同行した軽部晴文（最初の勤務期間：1979.6.1-2007.8.31）現校長も、家庭学校着任（1971）の理由の一つに、その様子に立ち会えたことがあったと語っている（2023.8.31）。そのことが示すように、寮生一人一人に対する理解は、寮長たちと並びうるほどといってよい。

そうであるにせよ、谷は校長であって、寮長ではない。校長としての谷を寮長からより際立って区別しているのはなにか。

これまでの論述と整理から導けば、理念の提示、ということではないか。その理念はどのような種類のものか、あらためてわれわれはここで注意してみよう。谷の講話が行われる場所はといえば、「礼拝堂」である。「望みの岡礼拝堂」と名づけられている。講話は「礼拝」ともいわれる。内容も、聖書の数節が読まれ、その意味が説かれる。イエスの話がふれられていることが寮生作文からうかがえる。そうした事情から、理念といえば、宗教上の理念とも捉えられる。

けれども、寮生作文を仲立ちとした、そのかぎりの藤田の応答はといえば、寮生の率直なうけとめについて藤田は着目している。「水の上を歩けば、とても面白いなあ」と記したTの「生き生きとした感受性」を評価していた（1973.12.16）。「やっぱりキリストの教えと言うものは正しいと僕は思います」という寮生の記述に「やっぱりという言葉を面白いと思う」と評価していた(1976.6.13)。そうした評価が示唆するように、宗教上の内容が語られた場合でも、―けっして「聖句」を意図して排しているわけではないが―日常の感受性を含めて「人間の生き方」（1977.1.30）にかかわる理念を提示してくれているものとして、藤田は谷の問いかけに応じている。信ずる、ということが求められている場合でも、

信仰生活そのものではなく、実社会での「人間の生き方」、その実践にかかわるかぎりではないか。谷の意図においても、そして藤田のうけとめにおいても、そうではないか。

われわれは、T 寮生についての日誌の範囲でのそのような事実認定と予想とともに、どのような理念が提示されたか、という点に焦点化して、谷校長に対する藤田のかかわりを検証したい。

資料 5　壇上の「難有」

筆者撮影。「難儀が有るということです。これはもちろん、ありがとうと読むのです。ありがとうと読むのですが、難儀が有ることがありがたいことなんだと、こう言うのです。難儀があることによって、それをぼくらが乗り越えようとする。ぼくら自身が強くなる。ぼくら自身が育つ、特に難儀を経験することによって、人に気持ちがわかるようになる、人の立場わかるようになる。　…そういうことを留岡幸助がいつも少年諸君に言い、そして少年たちの努力と奮起に期待した」(谷『少年たちと生きる』1990 年)。1979 年谷はこのように説明した。その場は、恵泉女学園記念講演会と記録されている。ここで「ぼくらが」というとき、谷は当の少年たちに限定してはいない。第一義的には、少年たち―「一見、加害者」であるとともに、「被害者」である少年たち―であるが、一般普遍的に、このことの真実に共鳴できる“われわれ“を指しているであろう。そしてその「ぼくら」も、講演の場はミッション系だったとしても、かならずしもキリスト者とは同一ではないであろう。

４．谷校長講話「ローマ人への手紙」について—寮生のうけとめを仲立ちとする寮長藤田の応答—

谷が「日曜礼拝」、「朗読会」、「収穫感謝祭」、学期終業式で「三賞授賞式」などの全体行事等での講話において、寮生の一人一人の行跡に即して個人、あるいは集団を称賛するとき、そこに谷の抱く理念が寮生の行跡についての言及を通じて間接的に語られる、ということは、もちろん事実として容易に確認できる。そうした場合とは異なって、より直接的に理念が語られる場合がある。古典、とりわけ聖書から題材がとり上げられる場合がそうである。パウロの「ローマ人への手紙」にふれた事例がある。日誌に添付された生徒作文の内容から、次の機会がある

1．1974 年 9 月 1 日「13 章の 4 節から５節」までが読まれたと記されている（本稿で紹介しています整理番号 33 の T 作文、他、整理番号 45）。その内容については生徒作文からは確認できない。

2．1976 年 1 月 11 日に行われた講話。第 12 章の 9-21 節までが読まれたと記されている。「愛」について谷は語っている。本稿の「3」でとり上げた整理番号 33 についての日記、及び作文によって一部が明らかである。それを含めて 13 名の寮生についての日誌、及び寮生作文によってうけとめが確認できる。

3．1978 年２月 12 日に行われた講話で、同校の機関誌『ひとむれ』1978 年 4 月 1 日刊の第 49 巻第４号（432 号）に掲載されている。「ローマ人への手紙」と題されている。第 7 章の 15 節から 22 節が読まれている。著書『ひとむれ』第 3 集（pp.97-102）に、谷はその講話全文を収録している。「わたしの欲している善はしないで、欲していない悪は、これを行っている」。その一方、「およそ人間一人ひとりの中に、善への意志がある」。この二つの「善と悪との激しい内面の格闘」を見つめることを、谷は求めている。この第二の事例は、「生きる力」にかかわる藤田の理解、という点で比較対象として見逃すことはできない。本稿ではふれずに別稿でとり上げる

4．1979 年 5 月 6 日に行われた講話。第 5 章 1 節から 8 節が読まれている。下記に引用しておこう。この時、谷は、礼拝堂正面に掲げられている「難有」（**資料 5**）もとくに語っている。

以下においてはこの第 4 の事例をとり上げる。講話内容そのものは、『ひとむれ』誌では確認できない。「ローマ人への手紙」と題されたかどうかは不明であるが、家庭学校の中心的理念の提示、という点でもっとも着目しなければならない。寮生たちも、この講話をそれぞれにうけとめていることが、藤田日誌を通じて跡づけることができる。

なお、講話した前日（5 月 5 日）に、40 年前の卒業生で学校教員となって講話した F 先生のことが寮生、藤田によってふれられている。谷校長講話に対す寮生の反応、藤田の応答も、この前日の講話と関連するので視野に入れておこう

「ローマ人への手紙」第 5 章 1—8 節

「5:1 このように、わたしたちは、信仰によって義とされたのだから、わたしたちの主イエス・キリストにより、神に対して平和を得ている。 5:2 わたしたちは、さらに彼により、いま立っているこの恵みに信仰によって導き入れられ、そして、神の栄光にあずかる希望をもって喜んでいる。 5:3 それだけではなく、患難をも喜んでいる。なぜなら、患難は忍耐を生み出し、 5:4 忍耐は錬達を生み出し、錬達は希望を生み出すことを、知っているからである。 5:5 そして、希望は失望に終ることはない。なぜなら、わたしたちに賜わっている聖霊によって、神の愛がわたしたちの心に注がれているからである。 5:6 わたしたちがまだ弱かったころ、キリストは、時いたって、不信心な者たちのために死んで下さったのである。 5:7 正しい人のために死ぬ者は、ほとんどいないであろう。善人のためには、進んで死ぬ者もあるいはいるであろう。 5:8 しかし、まだ罪人であった時、わたしたちのためにキリ

ストが死んで下さったことによって、神はわたしたちに対する愛を示されたのである。」（日本聖書協会、『口語訳聖書』1955）

寮生（整理番号 74）:F

1979.5.6
〇今日より、礼拝堂での礼拝が始まる。
初めての礼拝堂での礼拝に、じっと体をかたくして座っていた感じの F だった。体をかたくしていたというより、未知なものに接するもののこわばりといった方がいいかも知れないが、僕は、F の緊張した背中に如何にも若者らしい新鮮な感動を受けたのだった。
〇昨日今日と、F と M(**58)に博物館前のバラをトンネルに上げさせているのだが、その落ちついた手付きにはなんとはなしに都会っ子らしくない土くさい落ちつきがあって、いろいろ手出ししたいのをじっと差し控えて、F の仕事に見入っている。他の子とはどうしてもそりの合わない、摩擦の多い M(**58)が（中 3、51 年 7 月入校）、F とだけはいつもにこにこしながら、話しながら仕事をしているのが又不思議だなあ〜〜。

＊5.6F 作文
「礼拝感想文
今日の礼拝は、礼拝堂で行った。僕は、礼拝堂に入いるのは初めてだった。中は、けっこうすずしかった。まず校長先生が台の上に登り、讃美歌第一二一番の「主イエスキリスト生涯」を歌った。そして聖書の二三八ページのローマ人への手紙の第五章の始めから第五節まで校長先生が読んだ。そして、台の上というか、真正面に飾られている額の事を説明してくれた。「難有」というのは、困難や、苦労をすることを有がたく思いなさい。困難や、苦労をすればやがて大きく立派な人間になれる。と留岡先生が、言ったと、説明してくれました。聖書で読んだ所には、患難は忍耐を生み出し、忍耐は練達を生み出し、練達は希望を生み出す事を知っているから、患難をも喜んでいるのだと書かれている。僕は、苦労などは喜びだとは思わないが、人間は、苦労、艱難を乗りこえて大きく、そして素晴らしい人間になっていくんだなぁと思いました。それから讃美歌の第二四二番の神の招きを歌った。そして、校長先生がこの礼拝堂は、昭和九年に出来たのだと言った。昭和九年というと、今は昭和五四年だから、四五年も前に出来たものなんだなァ。でも中は、昭和九年に出来たとは思えないほど、きれいになっていた。これからも、ずうっとずうっと丈夫で、建っていてほしいなァと思いました。それから、讃美歌の第二六〇番の救贖を歌いました。歌いおわり、黙とうをして終りました。今日の礼拝は、僕にとっては、初めて礼拝堂で行ったので、いつも講堂でやっていたので、何か違ったふん囲気がありました。」

寮生（整理番号 60）:M

1979.5.6
今日の礼拝は谷先生、聖書讃美歌が終った後に、「自分にもっと自信を持つ様に」と、１人の父親のお話を例にとりつつ厳しく、且つ暖かく淳々と話され昨日の F 先生(40 年前の卒業生でもある小学校長―注)のお話と共に、１人１人、心中深く鼓舞される思いだった様である。

*1979.5.6 M 作文

河原国男

今日の司会（司式）は校長先生です。そしてまず最初に讃美歌を歌いました。そして讃美歌は 21 番を歌いました。そしてローマ人への手紙第 5 章の一節からでした。それから 5 節まででした。そして賛美歌は 263 番でした。そして今日の話になります。今日の話は聖書の話でした。そして今日の話は礼拝堂にある有り難うでした。そして今日の話はなんだかはずかしい事です。皆さんの父さんとか親とかが来ます。よく来ます。胸をはって来なく恥ずかしそうに来ます。そして今日の話はそう言う事です。ある日一人の家の父さんが来ました。そして私と話をしているうちにお父さんが涙を流しました。私とは、あかの他人です。それだけど私の前で涙を流してくれました。そしてその父さんは皆、私が悪いんです。それとか私が息子を駄目にさせたんです、とか色々言いました。そして息子は、いや父さん僕が悪いんだ、と言うようになれば良いのです。でも息子も恥ずかしいのです。帰省で帰る時に君らどこへいくのかと言われても恥ずかしそうに言います。先生が見たのは研修旅行で店で買物をしている時に、君らどこからきたの、と言われてもお客さんのすみのほうに行きます。そして言いません。やっぱり聞かれたら遠軽の家庭学校からだと言います。それを皆恥ずかしそうにします。そして僕は恥ずかしい心がなくなれば立派になれると思っています。僕も人から本館はどこかと聞かれたら一人か二人ならすぐあそこと言いますが何人もの人が見たらなんか恥ずかしいです。その恥ずかしい心をなくしたいと思っています。

―終り―

寮生（整理番号 64）:0

1979.5.6

今日の礼拝は谷先生、聖書讃美歌が終った後に、家庭学校を卒業した事の自信を人の前で堂々と言いる人間になって欲しいと、暖かく且つ厳しく淳々と話され全校深い感銘を受けたのだった。
昨日に続いての今日だけに、1 人 1 人、深く鼓舞される思いだった様である。

*5.9　0 作文

今日は、司会者は、校長先生でした。そして、僕は今年は、初めての礼拝堂での礼拝だと思いました。僕は、今日の礼拝は、初めてなので、礼拝堂のガラスが割れました。そして、今日は礼拝堂の中をきれいにしました。僕はとても良かったと思いました。それから、讃美歌は 1 番目は、121 番を歌いました。それから、僕は、聖書は、238 ページのローマ人への手紙第 5 章の 1 せつから 6 せつまででした。そして、患難をも喜んでいるからであると言っていた。それは苦しくても、苦しいのがあればとても、良い。そして礼拝堂の上の所に、木に有難と書いてありました。それから、有難と言うのはとても良いと思いました。そして、校長先生は、苦しい事をのりこえれば、あとで、良い、所に行くし、苦しい山をこえて、道を開いて行くんだと思いました。だから、F 先生も苦しい山をこえて道を開きそして校長先生になったんだと思いました。それから、そして礼拝堂の中でこの礼拝堂は、昭和 9 年にでき、いままでもっているから、約 50 年ぐらい使っていると思いました。僕は、これからまだ礼拝堂で礼拝をするんだと思いました。それと、僕は礼拝堂で何回礼拝したかと思いました。それから、礼拝堂は、家庭学校の中で一番古いいえだと思いました。まだ大事にしないとと思いました。　　終り。

寮生（整理番号 73）:M

1979.5.6

今日から礼拝堂での礼拝が始まり、今日の礼拝は谷先生、礼拝堂正面に掲げられている難有という意味について淳々と説き明かした後、家庭学校を卒業したという事を、堂々とした自信で言って欲しい

と暖かく、且つ厳しく話して、全校、今日も又深い感銘を受けての１日、僕は今日のＭの日記にも心洗われている。

5.6　M(**73)作文

今日は日曜日で礼拝が有りました。今日の司会（司式）は谷校長先生でした。
まず初じめは讃美歌 121 番を歌いました。おいのりをしてから、そして聖書を読みました。聖書は 238 ページのローマ人への手紙第五章一節から 6 節までを読みました。そして次は讃美歌 243 番を歌います。谷校長先生の話しです、今日話した事はいろいろな事を話してくれました。まずは忍耐など、後は、今はずかしい事は苦しい事だと言っていたが、なるほどそ（そう）言う事だと思っています。はずかしい事が有ると、それだけ自分が良くなるんではないかと思っています。はずかしい事がない人と言うのは、今ここにはいないと思っているし日本のどこにもいないと思っています。そうなれば自分の良さがだんだんなくなっていってしまうから、はずかしい事や、苦労などが有るから人間が少しずつでも良くなって行くと思います。そして校長先生は言っていたが、親が泣いて「私しが悪かったんです」と言って、もしもその子が、「そうだ親が悪んだ（悪いんだ）」と言う子は、そうかもしれないが、その子も悪いんではないかと思いました。悪い悪いと言うが、僕も前まではそう言う考えだったでした。だから今は考えなをして小学校、もうそんな考えはやめて、もっと良い考えに直しました。だから自分としても、少しは良くなってきてるとは思っています。だからこれからも少しずつでも良い考えにして良くしていきたいと思っています。そうすれば人に見られても良い人だと思われるんではないだろうかと思います。

―終り―

寮生（整理番号 69）:O

1979.5.6
今日の礼拝は谷先生、聖書讃美歌が終った後に、自分にしっかりと自信を持つ様にと淳々と厳しく、且つ暖かく話されて、全校再び深い感銘を受けての１日、
僕は僕で、
「ここに入ったからと言って親が悪いと思っても何もなんないし、やっぱり、自分が悪かったと思って、生活した方が良いと思います。」
と書いているＯの今日の日記にも、Ｏの成長をひしと見ている。

＊5.6　O 作文

今日の午前中は、礼拝で今年初めての礼拝堂で礼拝をしました。司会（司式）は、校長先生で初めに讃美歌の百二十一番を歌いました。それから、聖書のローマ人への手紙の第 5 章の一節から、八節まで読みました。それから、お祈りをしてから、又讃美歌の二百四十三番をうたってから、校長先生の話しを聞きました。話の内容は、今日初めての礼拝堂に来たので新入生も居ることだし演台の後ろ上の字を説明してくれました。普通のように書いた字なら、読めるかもしれないけどかざってあるやつは、見てもあまりわかりません。だけど今日校長先生が話してくれたので又思い出しました。それから、校長先生が言っていたのは、先生の所に皆のうちの誰かの父さんが来て、あの子はわたしが悪かったから、家庭学校に、今居るんです。と言ってお父さんは、泣いていたと言っていました。だけど校長先生も言っていたけど、子どもは、親が悪いと言っているけど親がちゃんとしていたら、こんな所にこなくて、今でも何も悪い事もしないで、学校も一日も休まないでふつうに行けるとは、誰も思わないと思います。そして、ここに入ったからと言って親が悪いと思っても何もなんないし、やっぱり、自分が悪かったと思って、生活した方が良いと思います。だから、父さんのせいにしたり、友達のせいにしたりするよ

り、やっぱり、自分の方が悪いと思って反省した方が早いと思います。だから、親のせいにしないようにしたいです。最後に讃美歌の二百六十番を歌って終りました。

―終り―

寮生（整理番号 67）:H

5.6
今日の礼拝は谷先生、聖書讃美歌が終った後に、家庭学校を卒業したという事にもっともつと自信を持って欲しいと淳々と厳しく暖かく話され、全校今日も又深い感銘を受けたのだった。
『　そして、自分でも恥しさをのりこえてこそ良い人になれると思い～　』
如何にも H らしい文。

＊5.6 H 作文
今日の礼拝は、講堂ではなく、初めての礼拝堂に行きました。そして、まず初（始め）は、讃美歌を歌いました。そして、ページ数は百二十一ページを歌いました。その次には、聖書を読みました。読んだページは、ローマ人への手紙、＜第五章の一節＞から読みました。とても、長く読んでくれました。そして、又、讃美歌を歌いました。そして、歌ったページ数は、二百四十三ページを歌いもう歌い慣れしているのでとても歌いやすかったです。そして、今度は、校長先生の話しです。今日この頃は、休みが多いために、お父さんやお母さんが来る人達がいます。そして、自分でも恥しさをのりこえてこそ良い人になれると思い研修旅行などの時に店に入って『あなた達の所は家庭学校？』ときかれても、家庭学校とは言いません。一時帰省に行く時など聞かれる時も恥ずかしくて言いません。そして、それ以上に、両親、父親などが、恥しいと思います。そして私と話してくれたお父さんが言って、涙を流しながら私が悪いために子どもを悪くしてしまったと泣きながらいいました。そして、ゴールデンウィークといって休みが長く続く事をいいます。そして、また遠くからわざわざ来てくれるのだから感謝しないといけないと思います。そして僕も校長先生が話してくれた事があるような感じがします。やっぱり、そうゆうことを言われたら恥ずかしいです。絶対にだれでも経験する事だと思います。そして、讃美歌を二百六十ページを歌いました。

ー終りー

寮生（整理番号 58）:M

1979.5.6
今日の礼拝は谷先生、聖書　讃美歌が終ったあとに、
「　もっともっと　自分に自信を持つ様に」
というお話を、厳しく且つ暖かく話して下さって、１人１人深い感銘を受けたのだった。
M は F 先生とすっかり親しくなって、白い歯をこぼれる様に見せて一諸に礼拝堂に入り、僕はじっと頭を下げる思いでその情景に見入っていたのである。

＊5.6M 作文

今日起きて思ったことは、今日は、6 時 45 分に起きてそれからは、I 君と筵蓆を全部剥いで、障子も全部剥いで、あとは、先生の所に行って、畑を少し起こして、あとは、シャベルを谷間で洗って、今日は、終りました。寮に上がって、食事をして、あとは、炊事の仕事を手伝って、あとは、遊んで、時間になって、並んで、今日は、礼拝堂で寮ごとになって、歩いて、40 年前の卒業生と話をして、行って、並んで、中へ入って、今年の始めの礼拝の司会の先生は、谷校長でまずは讃美歌を 121 番を歌いました。思ったことは、今日は大きい声で歌いました。聖書を校長先生に読んでもらいました。あとは、讃美歌は、243 番を歌いました。思った事は、皆が大きい声で歌っている人が今日は多かったと思いました。今日の話しは、まず僕達が、旅行へ行って、それが買い物をする時に店の人が「あんた達はどこの学校と聞かれると皆は何んも言わないと言って、恥ずかしがって、それで校長先生は、皆なにそれでは、何ぜ自分として、恥ずかしいかで、この 29 日〜5 日までは、休日の日が多く、家の人がここまで来てくれた人がいますと言って、ほとんどの親は、堂堂としていませんと言って、それは何ぜか皆なわかると思いますと言って、あるお父さんは、僕が悪かったんですと言って、泣いていましたと言ってある子供は、お父さんが悪い人だと言って、僕の思ったことは、それは、自分が人に明白（迷惑）をかけたんだから親にもあるし僕たちにもあると思いました。それで校長先生は、皆なに買い物をしても学校の名前えを言っても恥ずかしい心をなくすと言う事について話しをしてもらいました。　　ー終りー

寮生（整理番号 70）:T

1979.5.6

今日から礼拝堂での礼拝が始まり、今日の礼拝は谷先生、聖書讃美歌が終った後に、正面の掲額『難有』について淳々と説き明かし、続いて、家庭学校を卒業したんだという強い自信を１人１人が持って欲しいと呼びかけて、昨日に続いて全校深い感銘を受けたのだった。

＊5.6T 作文

今日は、午前中は、礼拝で、まず司会（司式）は校長先生で、まず黙とうで、して、少したってやめて讃美歌の一二一番を歌いました。そして僕は、しっていたので、僕は、大きな声で歌いました。そしてその次は、聖書の二三八ページのローマ人への手紙で第五章の一節から校長先生が読んで、僕は、聞いていて、僕は、わけのわからない所もありました。そしてだけど聞いていました。そして六節で終ってその次は、お祈りで今日の始めの事のお祈りでした。そして讃美歌の四三番を歌いました。そしてこれもしっていて僕は、3 番目ぐらいにしっている歌でした。そしてまた大きな声で歌いました。そして僕は、ここにきてからは、だいぶん歌を覚えたと思います。そしてその次は、話で、まず礼拝堂は、去年のクリスマスの時にすかったきりで（つかったきりで）今つかうのが始めて（初めて）だと言っていました。そして僕も、久しぶりだなと思いました。そしてこの礼拝堂をつかう前に新入生が大さんはってきたと（たくさん入ってきた）言っていました。そして僕もそうだなと思いました。そして僕は、新入生の頃には、始めてはった時は、（初めて入った時は）こ言所ろ（こういう所）かと思いました。そして皆なも同じでわ（は）ないのかとも思いました。そして校長先生が言ってまず、前に書いてあるのは、ありがとうと書いてあって、たとえばくろうやこんなんをありがたく（例えば苦労や困難を有難く）思い、それをのりこえればりぱな（乗り越えれば立派な）人間になれると言っていました。そして少したって終って讃美歌の二六〇番を歌いました。そしてこれも知っていて大きな声で歌いました。そしてお祈りをしました。

―終り―

寮生（整理番号 65）:T

今日の司会（司式）は谷先生、聖書讃美歌が終った後に、もっともっと自分にしっかりとした自信を持つ様にと、暖かく且つ淳々と話されて、昨日の F 先生のお話と共に、1 人 1 人に深い感銘を与いた（与えた）のだった。
T はじっと何やら考いこんでいる様子の 1 日。

＊6.6T 作文
今日午前中は、礼拝が有りました。そして今日からは、毎週礼拝堂で礼拝をする事に成りました。それからポスターを今日の朝までに持ってくる事に成っているのだけどもまだ出来ていない人がいるのでと藤田先生が言ったのでたすかったです。そして今日谷校長先生が話してくれた事は、はずかしいという事です。そして僕達は、研修旅行とかでそのそばに居た人があんたどこの学校と聞かれたらだまっています。はずかしく家庭学校だとは、いえません。そう言う人がこのがっこうには何十人と言うふうに居ると思います。でもその人が家庭学校てどんな所か知らなかったら言ってしまうのだろうと思います。そして僕は、こんな話しを礼拝の時に聞いた事が有ります。それは、桂林寮に昨年 O 君と言う人が卒業をしました。そしてこの人は、どこだったか忘れたけどある所に就職をしました。そしてあなたは、今までどこの学校に居ましたかと聞かれて家庭学校に居ましたと言いました。そして家庭学校という所は、どう言う所だと聞かれました。その O 君の母は、悪い事をした人が入る所だと思います。そしたら駄目ですねと言われました。それは、違う家庭学校と言う所は、そういう悪い所を直してくれる所だと僕は、二年ぐらいそこに居てやっと直って出て来たと言ったそうです。僕はよくはずかしがらないで言ったと思います。そしてすごく立派です。皆には、こんな根性がないと思います。僕は、こんな人も居るのだから、はずかしくなくおもいっきり言って欲しいと思います。

―終り―

寮生（整理番号:71 ）M

今日から礼拝堂での礼拝が始まる。
礼拝堂正面に掲げられている「難有」について淳々と説き明かした後、自分自身にもっと自信を持つ様にという谷先生のお話に深い感銘を受けての 1 日、僕は僕で、M の訴えの日記に沈思している。

*.6.6M 作文
今日の午前中は礼拝でした。司会（司式）は校長先生でした。そして讃美歌二十一番を歌いました。聖書を読みました。そして、讃美歌二百四十三番を歌いました。そして、もくとうをしました。主の祈りをしました。それから、校長先生の話をしました。そしたら、礼拝で思うことは始めて礼拝に入ったことです。そのあとに校長先生が、神のことばかり話をしてくれました。そして、聖書を読んでいる時に皆んなはしゃべっていました。そして、話が終わってから、斉藤先生がポスターのことで話をしました。斉藤先生が、月曜日に貰って来なさいといいました。それから、礼拝が終わってから、石上館に帰って来ました。そして食堂に居て日記を取りにいきました。そして皆は、うるさかったので、なんべんかも注意をしました。そして F(**74)さんが来て、僕ば、けっぱりました。そしたら、F(**74)さんが、なんにも言いませんでした。そして T(**70)君が来て讃美歌を教えてくれました。そした T(**70)君が、大きな声で僕の耳まで来て、讃美歌二十一番といいました。僕は、とてもにくたらしいかった。そして、M(**60)さんが、バスタオルを返してくれといいました。そしたら、M(**60)さんが「くれ」と冗談で言いました。そして、僕がいない時に M(**60)さんが、かってにもって行きました。僕は、とても悔しいと思っています。そして F(**74)さんが、バイクのポスターの紙を「ちょっとでいいから返して」と言ったら、F(**74)

さんが貰っていきました。僕がかしただけなのに、「早く返して」と言ったら、返してくれませんでした。そして、F(**74)さんは、うそをつきました。終わり。

以上のように、谷校長の 1979 年 5 月 6 日の「ローマ人への手紙」を内容とする講話は、当時の石上館の寮生たちによってうけとめられた。「難有」との関連も語られていたことがうかがえる。谷の講話を、当時の寮生 9 名の反応を仲立ちとして、藤田はどううけとめたか、以下にその特徴を明らかにしよう。

1)対話的にむき合う

「正面の掲額『難有』について諄々と説き明かし、続いて、家庭学校を卒業したんだという強い自信一人一人が持って欲しいと呼びかけて、昨日に続いて全校深い感銘を受けたのだった」（T)、「家庭学校を卒業した事の自信を人の前で堂々と言いる（言える）人間になって欲しいと、暖かく且つ厳しく淳々と話され全校深い感銘を受けたのだった」（O: **64)。という記述に代表されるように、内容そのものとそれに示される理念に対して、藤田は谷にむき合っている。

2)「人間の生き方」にかかわる関心

卒業を誇りに、という期待とともに、講話の前日にあった、卒業生で学校校長になった F 先生のことが、谷によって語られたようである。その点も含めて、世俗社会のただなかでどう生きるか、「人間の生き方」にかかわる理念が示されたものとして藤田は感銘している。その一方、「ローマ人への手紙」第 5 章の 1-2 節、5-8 節の「神の栄光にあずかる」という希望などの部分は、寮生は記述してはいない。藤田も、とくにふれず、明確な形では応答してはいない。

3)一人一人のうけとめに対する肯定的理解

人間の生き方という点で、寮生それぞれのうけとめに対して藤田は関心を示している。そして、肯定的、共感的に理解している。

F(**74)について

「台の上というか、真正面に飾られている額の事を説明してくれた。「難有」というのは、困難や、苦労をすることを有がたく思いなさい。困難や、苦労をすればやがて大きく立派な人間になれる。と留岡先生が、言ったと、説明してくれました。聖書で読んだ所には、患難は忍耐を生み出し、忍耐は練達を生み出し、練達は希望を生み出す事を知っているから、患難をも喜んでいるのだと書かれている。僕は、苦労などは喜びだとは思わないが、人間は、苦労、艱難を乗りこえて大きく、そして素晴らしい人間になっていくんだなぁと思いました。」と記した F について、藤田は「初めての礼拝堂での礼拝に、じっと体をかたくして座っていた感じの F だった。体をかたくしていたというより、未知なものに接するもののこわばりといった方がいいかも知れないが、僕は、F の緊張した背中に如何にも若者らしい新鮮な感動を受けたのだった。」と記している。

M(**73)について。

「今日話した事はいろいろな事を話してくれました。まずは忍耐など、後は、今はずかしい事は苦しい事だと言っていたが、なるほどそ（そう）言う事だと思っています。はずかしい事が有ると、それだけ自分が良くなるんではないかと思っています。はずかしい事がない人と言うのは、今ここにはいないと思っているし日本のどこにもいないと思っています。そうなれば自分の良さがだんだんなくなっていってしまうから、はずかしい事や、苦労などが有るから人間が少しずつでも良くなって行くと思います。そして校長先生は言っていたが、親が泣いて「私し（私）が悪かったんです」と言って、もしもその子が、「そうだ親が悪んだ（悪いんだ)」と言う子は、そうかもしれないが、その子も悪い

んではないかと思いました。悪い悪いと言うが、僕も前まではそう言う考えだったでした。だから今は考えなをして（直して)、もうそんな考えはやめて、もっと良い考えに直しました。だから自分としても、少しは良くなってきてるとは思っています。だからこれからも少しずつでも良い考えにして良くしていきたいと思っています。そうすれば人に見られても良い人だと思われるんではないだろうかと思います」。以上のように記述していた M に対して、藤田は、「僕は今日の M の日記にも心洗われている」と共感した。

H(**67)について。

「今度は、校長先生の話しです。今日この頃は、休みが多いために、お父さんやお母さんが来る人達がいます。そして、自分でも恥しさをのりこえてこそ良い人になれると思い研修旅行などの時に店に入って『あなた達の所は家庭学校？』ときかれても、家庭学校とは言いません。一時帰省に行く時など聞かれる時も恥ずかしくて言いません。そして、それ以上に、両親、父親などが、恥しいと思います。そして私と話してくれたお父さんが言って、涙を流しながら私が悪いために子どもを悪くしてしまったと泣きながらいいました。そして、ゴールデンウィークといって休みが長く続く事をいいます。そして、また遠くからわざわざ来てくれるのだから感謝しないといけないと思います。そして僕も校長先生が話してくれた事があるような感じがします」。こう記した H について、「『そして、自分でも恥しさをのりこえてこそ良い人になれると思い～　』如何にも H らしい文。」と藤田は共感した。

O(**69)について

「話の内容は、今日初めての礼拝堂に来たので新入生も居ることだし演台の後ろ上の字を説明してくれました。普通のように書いた字なら、読めるかもしれないけどかざってあるやつは、見てもあまりわかりません。だけど今日校長先生が話してくれたので又思い出しました。それから、校長先生が言っていたのは、先生の所に皆のうちの誰かの父さんが来て、あの子はわたしが悪かったから、家庭学校に、今居るんです。と言ってお父さんは、泣いていたと言っていました。だけど校長先生も言っていたけど、子どもは、親が悪いと言っているけど親がちゃんとしていたら、こんな所にこなくて、今でも何も悪い事もしないで、学校も一日も休まないでふつうに行けるとは、誰も思わないと思います。そして、ここに入ったからと言って親が悪いと思っても何もなんないし、やっぱり、自分が悪かったと思って、生活した方が良いと思います。だから、父さんのせいにしたり、友達のせいにしたりするより、やっぱり、自分の方が悪いと思って反省した方が早いと思います。だから、親のせいにしないようにしたいです」。こうした 0 のうけとめについて、藤田は、「僕は僕で、『ここに入ったからと言って親が悪いと思っても何もなんないし、やっぱり、自分が悪かったと思って、生活した方が良いと思います。』と書いている O の今日の日記にも、O の成長をひしと見ている」と肯定した。

4)問題発見に対する認識関心

辛いことがあるかもしれないけれど「自分にしっかりとした自信を持つように」という趣旨であったが、残念なことにそうなっていない、ということが寮生に意識されていることにも、藤田は関心を示している。

T（＊＊65）について

「僕達は、研修旅行とかでそのそばに居た人があんたどこの学校と聞かれたらだまっています。はずかしく家庭学校だとは、いえません。そう言う人がこのがっこうには何十人と言うふうに居ると思います。でもその人が家庭学校てどんな所か知らなかったら言ってしまうのだろうと思います」と記す T について、「T はじっと何やら考いこんでいる様子の 1 日」。

最後にとり上げた M についても、谷の講話に対する「感銘を記述する一方、それとは直接関係しな

い寮生間の摩擦に言及する寮生 M の問題関心に対して、藤田は注意をむけていた。

５．寮長藤田俊二の校長谷昌恒との対話的関係 ―「試練」の理念提示とその実証―

以上われわれは、厖大な藤田日誌の一部分について、その内容を徹底して跡づけてきた。現時点で公開されてはいない状況を踏まえて、資料紹介的な意味を含めて可能なかぎり関係する箇所の全体を引用することとした。そのことは本稿主題の意識化を妨げることになったかもしれない。本稿の中心な問いは、藤田は校長谷昌恒とどのようにかかわったか、対話的関係が成り立っていなかったか、ということだった。以下、この点をあらためて考察する。同時代の同行者たちの証言から、直接の人格的交流の現実を把握することもできようが、本稿では、日誌等の資料そのものからの考察である。

その問いをここで意識してこれまでの内容と整理をふり返ってみよう。

寮生を仲立ちとして藤田が谷校長に示したかかわりについて、本稿では、二つの局面で捉えた。

1)谷校長が着任当初からすでに在籍していた一寮生の長期にわたる作文（1973.4-1977.3）を仲立ちとするもの。校長講話等を寮生がどうけとめているか、その方向性をめぐる谷校長と藤田のかかわり

2）校長講話「ローマ人への手紙」（1979 年 5 月 6 日実施）についての寮生たちのうけとめに示される、谷校長と藤田とのかかわり

これらの内容を通じて、基本的性格にかかわる次のことにまず着目しよう。

谷校長に寮長藤田は相対し、対話的関係が示されていること。両者が相対しているとき、まず注意されるべきことは、谷は校長として組織上の権限を有している、という事実である。そのゆえに両者間には、職務上の上下関係が「因果的」に規定される。藤田に対して、というわけではないが、谷自身「管理者」10)として振る舞うこと、意識する必要を感ずる場面がないわけではなかった。藤田の意識においても、その関係性によって規定されることは否定し難い。けれども、日誌を通じて見出される両者の関係、とりわけ藤田の谷にむけた相対し方は、そのような制度的な制約はうかがえない。藤田にとって、その講話そのものの内容がどうあったか、そして、寮生にどのようにうけとめられたか、ということが決定的に重要となっている。人格的に「自由な存在」として、藤田は相対している。その場合二つのことに注意したい。一つは、直接的に藤田がむき合っているのは、寮生であるが、それを仲立ちとして谷の存在に藤田は関心をむけ相対している 11)。ブーバーのいう「対向」（Hinwendung）ともいってよい。もう一つは、谷の藤田に対するむき合いという一方の事実を捉えれば、「内的行為の相互性」が想定できる、ということである。それは、互いに一体的に溶解するというのでもない。両者は直接的に対面せずとも、谷によって語りかけられ、問いかけたものと、それに対すると藤田の応答、という相互性である。こうした特性が、1、2 回というのではなく、長い期間にわたる持続的な態度として成り立っている。この点で、あらためて「対話的関係」と称することができる。

こうした形式上のかかわりは、藤田の谷に対する基本的関係性を規定している。とすれば、両者はどのような異同特質を示していたか。両者間の対話的関係が示した内実を明確にするために、2 点指摘しよう。

第一に、谷は校長職でありながらも、80 名余の在籍する寮生一人一人についての理解を示し、「収穫感謝祭」「朗読会」等の全体行事においてその取り組み状況や人間性について語ることができているということ。「T には、谷校長が１人１人にじっくりと語りかけて下さった言葉の、自分に対しての言葉にはっと考えさせられた様だ。寮長の僕がしみじみ頷く程に、今日の谷先生の１人１人の生徒に対する言葉は、適切、かつ暖かい励しに満ちて…」（1977.1.13）と記されていた。この点で、藤田は谷と基

本的な共同関係にある。

第二に、寮生理解という点でも谷は一人一人に即して的確であったろうが、それ以上に、家庭学校の構成員全員を導くに足るもろもろの理念（難有、流汗悟道、暗渠の精神、三能主義、など）の提示という点で、谷は校長としての自己の役割を発揮していたということ。その点に、本稿で紹介した日誌と生徒作文からその一端がうかがえる。寮長から際立って区別される谷校長の持続的な役割があったとすれば、まさにその点であろう。

以上のように基本的特性について捉えられるとすれば、藤田は谷校長に対してどのように相対したか、協働といえる役割分担を示していたのではないか。この点を家庭学校の歴史的厚みをふまえて考察してゆこう。その際、自立にむかう人間のあり方に関する中心的理念の提示、ということに焦点化する。

講話において谷はなにを理念として語っていたか。

本稿は、はじめに「落穂ひろい」と「落葉取り」をとり上げて、谷校長と寮長藤田の眼差しの共通性にふれた。その眼差しには、役割分担にかかわって見逃し難い相違点が示されていたことに、ここで注意をむけよう。

「落穂ひろい」は重たい来歴を伴っている。その起源を遡れば、「旧約」に属する文献で記述され、紀元前イスラエルの農民習俗にかかわる。マックス・ヴェーバーの歴史社会学的研究『古代ユダヤ教』（1917-19）によれば「落穂拾い法」として倫理規範として位置づけられていた事情を知ることができる。「残株の落穂は畑に残しておかねばならぬ。畑の最後一株まで残りなく収穫してはならぬ、むしろこれを必要とする者のために少しは残しておくべきである、と」。「カリテート」（人道的愛）と称しうる共助の倫理を表すものとしてヴェーバーは捉えていた 12)。そうした古典的来歴についての認識が、「落穂ひろい」に対するこれまでの眼差し一般に含まれていたかどうかは、ここでは問わない。ミレーの作品も、こうした倫理規範にかかわる来歴を踏まえられたものであったかについても、ここではどうでもよい。いずれにせよ、ミレーの作品も、古代イスラエルの農民習俗に関わる場面に着想をえているのであろうと推測できれば十分である。谷も、この点について講話のなかでは言及してはいないが、なにほどかの背景知識をえているに違いない 13)。藤田の場合どうか。「落葉取り」する寮生に藤田は着目しているが、古典的来歴のある「落穂ひろい」を類推として認識しているわけではないだろう。藤田の場合は入寮以来、そして、入寮前も含めて、この寮生がどう過ごしてきたか、その足跡であろう。したがって、「落穂ひろい」「落葉取り」への眼差しといっても、それを支えているのは、谷の場合には、当の実践にかかわる理念的基礎づけであり、藤田の場合には、当の実践にかかわる寮生の足跡である。それぞれがどうあるかが、両者を分けている。喚起される文脈が異なっている。そうした違いは、これまでに跡づけてきた両者の対話的関係のいかんにかかわっていたのではないか。汗を流して働くことの大事さを生徒たちに感じとらせる−学校全体で「生産教育」「作業班活動」と呼び慣わしている−ということなどの基本方針を共有するという共通基盤を有しながら、両者はどのような役割分担を示していたか。事前の合意、あるいは主観的な継承の意識ではなく、史的脈絡のなかでの客観的な事実関係の結果としてどうであったろうか。

谷は、本稿で跡づけたように、「パウロの書簡」から「ローマ人への手紙」の一部をとり上げた際、「難有」を意識させる形で「徳の試練」について指摘した。そのような背景を有することばが家庭学校の理念として位置づけられたのは創設者留岡幸助からであるが、われわれがここで注意しなければならないのは、その来歴である。留岡も「パウロの書簡」に着目するが、かれはより遡って古代ユダヤ教の文献からその理念を以下のように把握している。

「人生は試練なり」という論説をかれは 1897(明治 30)年発表している 14)。その年は、1894 年米国の監獄施設、児童福祉施設を見聞した数年の後であり、『感化事業之発達』を刊行した年であり、そして、1899 年東京巣鴨に「家庭学校」を創設する前である。その論説にいう、「卑見に拠れば人に轗軻（かんか。道が平坦ではないこと。困窮すること–注）人のこと多く、世に厄難の絶えざるは人類を成玉せん為なり、…人類を成玉せんには刺激物なくんばある可らず、この刺激物を名けて試練とは云ふなり、…航海に必要なるは風なり、風あるが為に青空は清く、風あるが為に船は馳るなり、風は呪咀にあらずして賜なり、教育に必要なるは試験なり」。留岡はこうした見解を裏づける根拠として同論説中で複数の典籍から引用しているが、その一つは次のものである。

神よ汝は我等を試みて白銀をねるごとくに我等を練たまいたればなり（詩篇 66 章 10 節）

「試練」ということを意味する「練る」「ねる」ことがここにユダヤの古典から着目されていた。そのことばの意味について、4 点を指摘しておこう。第一に、ここでは「この世」ということ、「艱難」「厄難」免れ難きこの世俗の現実社会をどう生きるか、というか課題に対する指針として、留岡は捉えていること。内面的な信仰生活ということはここでは想定されはいない。第二に、誰にとってか、といえば、「我等」であること。歴史的には古代イスラエルの人々であるが、われわれ自身も共通して含まれる集合的な主体であること。単独の一個人、法に触れたという属性を有した個人には限定されていないこと。第三には、「成玉」ということばが示すように、人間がどのようになるか、どう理想的な人間になるか、という人間形成の指針として位置づけられていること。こうした意味を有する「試練」をかれは把握していた。その上で、留岡は、同じ論説で紀元前の古代ユダヤ以降の紀元後のパウロにも言及する。

使徒パウロにこの修養備はりたるを以彼揚言して曰く「艱難にも尚ほ歓喜を為す」と、吾人がこの世にありて常に喜悦に溢るゝの生涯を送るもこの修養あるに拠れり

ここには、「難有」の二文字が古典的根拠を有している、ということが「艱難」の語とともに留岡によって示されている。この「難有」二文字を留岡は、北海道家庭学校の開校前の 1911(明治 44)年の書簡において、揮毫をお願いし、自身の応接間に掲げたと記していた 15)。それ以前の時点で確認できる留岡の所見として貴重である。われわれは一般に程度の差はあれ、なにかしら「試練」といえる現実にいたる場合、所与の経験としてそれを事後的に反省する。しかし、留岡が「修養」ということばでこの論説で強調しているのは、より積極的である。「吾人は人世の試練を刺激物として受納するも、呪咀として擯斥せざるなり、修養さへ我に備らんには凡の不遇は吾人をして成玉、潔誠ならしむ一動機足らずんばあらざるなり」(「人生は試練なり」)。試練を単なる苦難として排斥することはしない。それどころか、事前に行為の「動機」にかかわる理念としてうけとめ設定すること、その点が強調されている。一般的な事例として、艱難、苦難がたんなる艱難、苦難に終始する、ということもありえるだろう。けれども、艱難、苦難が、「修養」ということ、その者が成長する、という人間形成に結びつけられる、という確信をともなう。明示されてはいないが、仮説的部分が含まれている確信である。結果として成長を伴うがゆえに「有難い」とうけとめることができる、という意味である。この点を第 4 の特徴として捉えよう。「試練」ということを教育の理念として留岡が特徴づけるとき、そのような積極的な価値づけを伴っていることを見逃してはならない。みずからの課題として「試練」をうけ

とめるとするならば、人間形成に結びついていることを“確証”し、自己肯定することが重要となるだろう 16)。

このように、「試練」についての共感的理解を論説中に確認するならば、谷は、「試練」についての留岡の認識を正当にうけ継いでいることがわかる。谷自身が、留岡のこの論説の存在を知っていて、その内容を踏まえて、寮生たちを前にして講話したかどうか。その点はわからない。留岡のその論説を掲載している著作集第 1 巻は、谷の校長在任中の 1978 年に公刊されている。よって、参照可能な状況があった。当該箇所を見出すことによる主観的な継承関係の有無とは別に、客観的事実関係として捉えれば、理念そのものを継受している、という系譜の事実がここに確認できる。「難儀があることが“有難い”ことだ、私たちは思っているのです」17)と谷は別の機会、家庭学校の外、一般社会でも語っていた（**資料 5**）。第二のこと（誰が、という主体のこと）ともに、とりわけ第四のことは、谷自身はおりおりに語り、「教育の根源的矛盾」18)として立ち入って強調していた。創設者留岡幸助が示していた所見に支えられつつ、戦後の経済成長期の豊かさを意識して、それゆえに普遍的視野を強調して、熱量をもったことばで語っていたことを示している。なにほどか挑戦的でもあった。「少年たちの置かれている場所が、いかにきびしいものであるかは十分に分かっている。にも拘らず、」19)（傍点は河原）と、逆説的に表現していた。谷は当の講話において、パウロの書簡より「ローマ人への手紙」第 5 章を読み上げて次のように語っていた。寮生の証言からも引用しよう。「患難は忍耐を生み出し、忍耐は練達を生み出し、練達は希望を生み出す事を知っているから、患難をも喜んでいるのだと書かれている」（F:**74）。「試練」についてのこうした説明によって、寮生たち日々、そして卒業後の人生は、困難をうけとめて克服する力を示す理念として位置づけられる。しかもその場合は、意図的に人間を形成するという意味で教育理念として特徴づけられる。藤田が評したことばでいえば、「人間の生き方」そのものの指針である。「僕は、苦労などは喜びだとは思わないが、人間は、苦労、艱難を乗りこえて大きく、そして素晴らしい人間になっていくんだなぁと思いました」（F:**74））という感想は、谷の問いかけに対する真っ直ぐな応答である。そして、「苦労などは喜びだとは思わないが」という部分は、第 4 の「矛盾」にかかわる戸惑い、あるいは素朴には理解し難い思いを率直に明らかにしている。谷校長が、寮長たちと対比し際立って示していた役割は、こうした人間形成の中心的理念をうけ継ぎ、寮生はじめとする家庭学校の構成員に提示している点に存する。谷の自覚 20)においても、そのことがたしかに言明されている。寮長藤田と対比しても、この役割は傑出している。

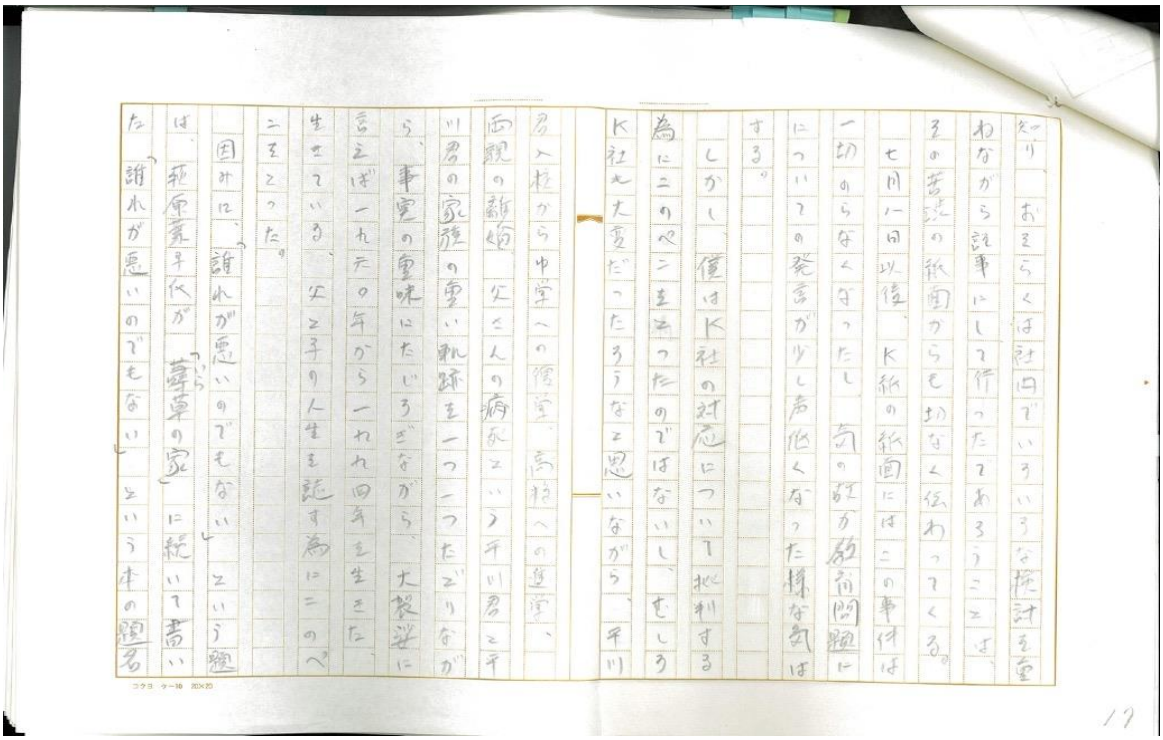
以上のような谷の取り組みに対して、寮長藤田はどのような役割を果たしただろうか。日誌を通じて示されていたのは、講話に示された理念に「深く感銘」するとともに、それ以上に寮生一人一人がどのように谷の講話をうけとめていたか、という点であった。その場合に、講話内容がいかに誤解されていたか、という点から評価するのではない。そうではなく、一人一人において、それぞれの足跡をふまえて、どう個性をもってうけとめられていたか、という寮生理解という点で一貫していたことである。

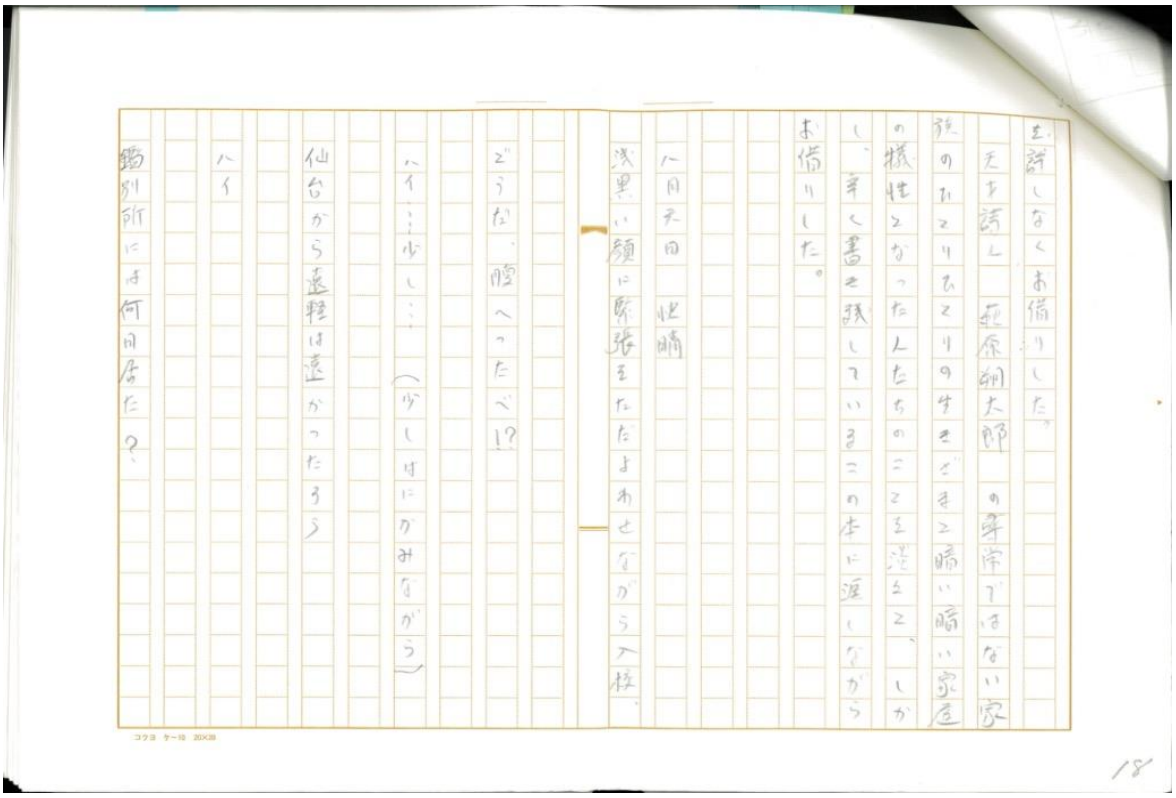
こうした藤田の姿勢は、谷を特徴づけている理念の提示、とりわけ、より限定して「試練」という理念の提示とどのように関連するだろうか。谷個人に対する主観的な継承の意識の有無ということではなく、客観的な事実にかかわって対話的関係として成り立っていたかどうか。この点を検証しよう。

この点でわれわれが着目しなければならないのは、なにかしらの罪を犯した寮生自身の行為責任という以上に、これまでの寮生の足跡、とりわけ「患難」とも「艱難」ともいえる逆境に陥った境遇条件に対する理解である。「不運として言い様のないハンディを数多く背負っていつ我々の少年たちですが」と藤田は『ひとむれ』（1988 年 11 月 23 日、通巻第 577 号）の「後記」で記している。「我々の」

という書きぶりにもうかがえるように、少年たちの置かれた境遇の「不運」、あるいは「不遇」については、家庭学校職員に共通する認識といってよいであろう。「私たち職員は、ここの少年たち、一見加害者である少年たちはまぎれもなく被害者であることを知っているのです」と谷校長も語っていた 21)。そのような基盤に立って藤田が際立っていたのは、その境遇条件に対する理解の徹底性、ということではないか。

その点を顕著に示しているのは、「誰れが悪いのでもない ―ある父子 1960 年から 1994 年 2 月までの日々―」と題した藤田の草稿である 22)。400 字詰め原稿用紙 157 枚に及ぶ。1981 年 8 月から 1983 年 1 月まで、石上館に在籍した一寮生（整理番号 89）のことが記述されている。平川幸作と名づけられている。地方都市での幼児に対する「通り魔的犯行」によって少年鑑別所を経て入校することになった。内容的に創作的部分を含みながら日記体で書かれている。脱稿年は不明であるが、「帰省後」（藤田）、すなわち退職後に作成された。タイトルは、藤田自身がこの草稿本文で断っているように、萩原葉子『誰が悪いのでもない–明子 は何処へ–』(1986) による(**資料 6**)。藤田のこの草稿中、本稿の関心からとり上げたい箇所は、下村湖人『次郎物語』についてのこの寮生の読書感想と、それについての藤田の所感である。以下、日誌中の記述と草稿中の記述を対比しよう。





資料 6　草稿「誰れが悪いのでもない」

筆者撮影。「平川君の入校から中学への復学、高校への進学、両親の離婚、父さんの病気という平川君と平川君の家族の重い軌道を一つ一つたどりながら、事実の重味にたじろぎながら。大袈裟に言えば一九六〇年から一九九四年を生きた、生きている、父と子の人生を誌す為にこのペンをとった」と藤田は記している。「平

川君」という少年を設定してまで人生の足跡を辿りながら、「誰れが悪いのでもない」ということを実証したいということだろう。この主題設定は、萩原葉子の作品が導いてくれたと、ここに藤田は記している。この自覚を超えて、客観的な事実関連を辿るならば、普遍的でもある理念に与っていることを、われわれは認識するであろう。

1.21
午後から職員会となり、寮に残った皆には、今迄読んだ本からの読書感想文を書いてもらう。
〇次郎物語
「小さい時から苦労をしたり我慢をしたりした次郎の様に僕もそうゆう生き方をやってみたいと思いました。」

少ししか読まない本を他の子から応援してもらったり、教えてもらったりして書いた感想文が多い中で、次郎の生き方の中に自分の生き方を二重映しにさせながら読み切っている（*＊89）の感想文は、群を抜いた迫力で身につまされるものがある。

「二重映し」というのは、この寮生も、「次郎」と同様に、継母のもとで冷遇されて育ってきたからである。このことについて藤田は、作文「自分の母の事、生んでくれた母、育ててくれた母」（1981.12.22）によって、その内容の一部を寮生自身から知るとともに、幼年期を過ごした実母を訪ねて生育事情を確認していた。こうした経緯をふまえた日誌記述に寮生が記述した作文が日誌に添付されている。これに対して、草稿では以下のように記されていた。

一月二十一日
「先生、朗読会では読みませんけど、読書の感想文を書いたので持って来ました。読んで下さい。」
とわざわざ言いに来て持って来た。
寡黙な幸策は、人が喋ったり笑ったりしている時はほとんど本を読んでいる。今読んでいる「こころ」の感想文かなと思って受け取ったら、下村湖人の「次郎物語」の感想文、里子に出された幼名虎太郎、後の次郎がたどった幼ない心の軌跡の物語、幸策がどの様に読みとったか急に興味が湧いて来て一気に読む。

「僕は去年の七月十日に仙台少年鑑別所に入り約一ヶ月間の間に色々な本を読みました。その中には五日間かけてかかって読んだ『次郎物語』があります。次郎物語は下村湖人という人が書いた第一部から第五部までの自伝のような長編小説です。でも次郎物語は作者の死によって未完成のままで終わりました。
物語の主人公は小さい頃は虎太郎といい五才から次郎とよばれ、次郎は生まれた時は猿みたいな顔をしていて、おばあさんや母は『なんて小にくたらしい顔をしているんだろう』と思ったそうです。母は乳が出なかったので、田舎の学校の用務員室に住んでいるお浜という女の人にあづけられて育ちました。やがて次郎が里子から帰って来た時は、本田家が嫌で嫌で毛嫌いしました。そして毎日ひねくれてばかりいました。そしておばあさんは、母さんのお民が居ない時に食べ物で次郎をいじめるのです。

そんな或る日、次郎は何故か別の部屋にあったお菓子の入っている箱を見つけて、その箱を壁にたたきつけて踏んだり蹴ったりします。又、その他に兄の小学校の教科書を便所にげたりしました。そのようにいつも次郎は家庭に仕返しばかりして来ました。

やがて次郎は小学校に入学して、六年生の演説を聞いている時に、みんなびくびくして下を向いているのに次郎だけは演説している人の目をにらみつけていました。それをみたその六年生は勘にさわって怒り、次郎と言い合いをして殴り合いになりました。

そして何年かたって次郎が小学校三年生の頃に、お浜の引っ越しの話や小学校の建て直しなどの話があり、次郎は五才まで自分を育ててくれたお浜たちが引越した後のお浜の部屋の土台に座り、小さい頃から今までの事を思い出していました。その頃の次郎は小さいながらも勇気と腕力があり、いつも喧嘩をしたりしていました。そんなある日、次郎と仲間たちが遊んでいる時に、誰かが次郎の兄がやられていると言って来ました。次郎はいくら兄が憎らしくても兄弟だと思ったかどうか分かりませんが、とに角兄を助けに行きました。そして川に落ちても取っ組み合って泥だらけになって、夕方おそく帰って来てどんなに叱られるかと思ったら、昼間あった事を兄が全部母たちに話していたので次郎は反対にほめられました。
又、次郎の兄だったか弟だったかが父「じゅんすけ」の大事にしているソロバンを壊してしまいました。そして父の部屋に呼はばてソロバンの事を聞かれましたが、ソロバンを壊したとは誰も言いませんでした。そして母は三人にある話をしてから次郎をうたがいました。次郎は兄だか弟だか分からないけれど人のやった罪を自分がかぶろうと決心しました。次郎は強く叱られ、風呂場にずっといました。その時に戸がカタカタ音をたててなってから兄弟の一人が帰入ってきて、自分がソロバンを壊したと白状して次郎にあやまりました。次郎はその事を秘密にして最後まで兄弟の罪をかぶりました。

僕はこの次郎の根性が好きです。そのあとしばらくして次郎は母を失ないました。お葬式の時にお浜も来て何年振りかの再会をしました。それからの次郎はまるっきり性格が変わり、本当にすごい成長をしたなと思いました。僕はこの次郎の苦労したところと、その後の成長した姿がとても好きです。小さい時から苦労したり我慢したりした次郎の様に、僕もそういう生き方をやってみたいと思います。次郎物語は第五部で未完成のまま下村湖人という人は亡くなりましたが、その後の第六部、 第七部も読みたかった気もするし、第五部で未完成のまま終わっているからその後の次郎の姿を想像できるからいいという気もして、今もそのことを時々考えています。」

去年の七月に読んだ「次郎物語」の感想を今になってもこの様に刻(ママ)明に書ける幸策の気持ちを思い、次郎と自分の人生をぴったり二重映しにして今を生きている幸策の凜とした気概を思い、今日も又いい文を読ませてもらった。 そして、いつの日か大人になった幸策と、今幸策が黙々と読み続けている夏目漱石の「こころ」について語り合える日の来るのがとても楽しみになって来た。（下線は河原）

対比してみると、基本的には同じ内容であるが、微妙な違いが示されている。草稿で少年が「寡黙」であり、少年鑑別所で過ごしたということは、日誌でも記載されている事実である。そして、草稿中の寮生の作文で記された「僕はこの次郎の苦労したところと、その後の成長した姿がとても好きです。小さい時から苦労したり我慢したりした次郎の様に、僕もそういう生き方をやってみたいと思います」という箇所も、実際の寮生の作文では、若干の表現に違いはあっても同様である。「自分がソロバンを壊した事を言いましたが、次朗は秘密にさせといて最後まで兄弟の罪をかぶりました。僕はこの次朗の成長した姿が好きです。それから次朗は母を失ないました。葬式の事にはお浜も来て何年ぶりか

の再会をしました。それからの次朗はまるっきり性格が変わり本当にすごい成長をしたなと思いました。小さい時から苦労をしたり我慢をしたりした次朗の様に僕もそうゆう生き方をやってみたいと思いました」となっている。「苦労」を経ての「すごい成長」、という点で同じ筋道がたどられている。こうした作文について、「二重映し」という少年理解も、草稿、日誌で共通している。他方、草稿中の下線部分が加筆されている。「今を生きている幸策の凜とした気概を思い」という箇所とともに、これからの「成長」にむけた藤田の期待が込められている。こうした強調に、実際の日誌記述を超えた、藤田の価値判断が草稿に示されている。冷遇して育てられてきた経緯があること、その事実についての徹底した認識には、―14 歳未満で少年法適用外であったとはいえ、当の少年の「通り魔的犯行」そのものが許されるとは藤田自身も考えないが―、そのゆえにこそ、「成長」にむけた期待が示されているとよい。

藤田の以上のような寮生理解、これまでの生育環境を踏まえた寮生の足跡理解との関連で、谷校長のありようを対比しよう。理念、とりわけ「試練」という理念を提示していた谷の取り組みと関連づければ、どうであろうか。両者は、「内的行為の相互性」（ブーバー）という点で、互いに補う関係であることがわかる。協働的に役割分担しているのである。「患難」を「試練」としてうけとめて生きるべきではないか、という谷の問いかけと、それに対する藤田の応答が続いている。すなわち、われわれの寮生、一例としてこの寮生は、たしかにその予想通りにこれまで難儀しながらも乗り越えて生きてきた証がある、それゆえ、これからも期待の通りに生きゆくに違いない、という応答として捉えることができる。寮長として、こうした成長の足跡を一つ一つ“実証”することが藤田の課題である。当の寮生自身の側の“確証”するという努力と呼応する。こう捉えることができたとすれば、藤田の谷に対するかかわりは、制度上の上下関係を超えて、「試練」を理念として共有し、協働的に役割分担する、という点で対話的関係であったと特徴づけられる。

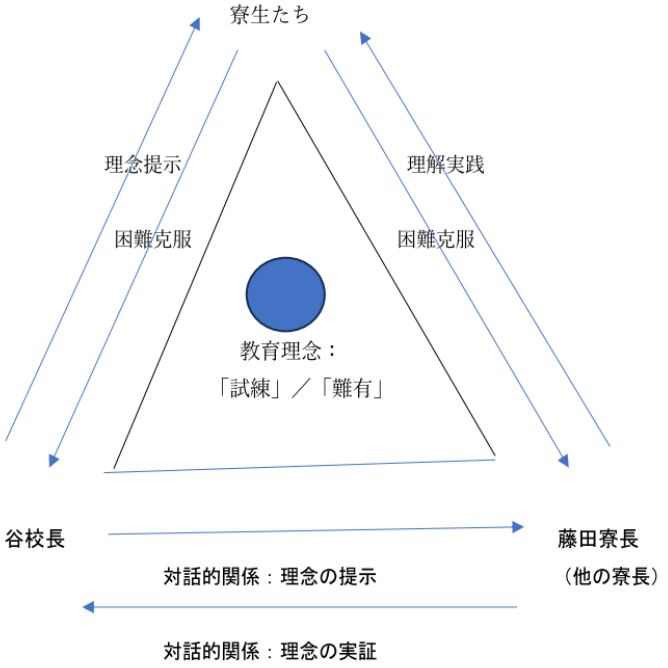
このような藤田の実証的応答の性質にかかわって、2 点補足しよう。第一に、後の谷の問いかけについて。藤田の草稿「誰れが悪いのでもない」でとり上げられた寮生が石上館に在籍したのは、1981-1983 年だが、その後、谷校長は「次郎少年の歩み」と題した論稿を『ひとむれ』1996(平成 8)年、第 668 号、に発表した 23)。谷が当の寮生の 1 月 21 日付の作文内容のことを知っていたかどうかはわからない。印象深い形で、谷の記憶にもこの少年のことが刻印されていたことがうかがえる 24)。いずれにせよ、その論稿末尾で谷はこう記していた。「今、次郎は 14 歳、諸君と同じ年齢です。泣きながら、傷つきながら、考えながら歩み続けています。真実のその歩みを『次郎物語』を通じて、諸君と共に、さらに学ぶ機会が欲しいと思う」。谷校長の主観的意図を超えて、ここに客観的な事実関係として示されているのは、藤田の応答をうけた谷によるさらなる問いかけである。それは、家庭学校の 80 余名すべての寮生にむけた問いかけであるとともに、同志としての藤田を含む寮長にむけた問いかけでもあった。第二のことも、ここに見落とすことはできない。藤田と同様に同時代に寮長（椋泉寮：1971.4.1-1979.4.30）をしていた花島政三郎（1940―、昭和 15―）の問いかけである。谷のこの論稿が掲載された年、『10 代施設ケア体験者の自立への試練』（1996）が公刊された。北海道家庭学校を直接対象にした社会学研究として卓越している本書では、寮生たちが、入所以前にどのような家族構成、生育環境とともに問題行動があったか（47 事例）、家庭学校でどのように変容し、豊かに「成長」したか、そして、退所後、どのようなアフタケアをえたか（46 事例）という点について、数多くの事例を通じて実証的に明らかにしている 25)。書名の一部にあるような「試練」といえる様相が全体を通じて記述されている。花島の問題関心（1996）も、直接的に谷の「難有」の問いかけ（1979）をうけ継いでいる、という主観的自覚があるわけではないだろう。その自覚の有無は別として、ここでも客観的な事実関係

として捉えれば、藤田の―谷の理念提示に対する―応答に対する、さらなる問いかけと、自らによる応答という形になる。藤田の場合には、一人の寮生が客観的に示した足跡の事実、およびその事実が創造的に喚起する足跡、これらに徹底した応答であった。すなわち、「誰が悪いのでもない」苦難、より普遍史的にいえば、「罪なき苦難」がどうであったか、という認識(マックス・ヴェーバー『古代ユダヤ教』26))が個人史に即して詳細に示されていた。それに対して、花島の場合には、なにほどか個人史的な詳細を犠牲にしても、どのように家庭学校全体として客観的に共有できる事実であるか、という問いかけと、それに対する実証的な応答である。本稿で跡づけた藤田の応答は、こうした取り組みとは対比的な位置関係を示していた。

６. 寮長藤田の校長谷との対話的関係が示した意義―「試練」を理念として継受する教育共同体の構築―

寮長藤田は、以上のように、「試練」を理念として校長谷昌恒と対話的関係を示していたとすれば、そのような関係性はどのような意義を示していたか。

この理念は、「難有」ということばにひき継がれている。これが北海道家庭学校の中心的な理念として創設以来今日まで位置づけられているという経緯を、ここで再確認しよう。そのことは単に校長と一寮長という二者関係にはとどまらない意義を示している。われわれは、寮長藤田と寮生たちが対話的コミュニケーションによって結びつけられている、ということ、そしてその様相をすでに知ることができる。中期日誌に属する一部日誌よる検証であるので、寮長―寮生関係一般を特徴づけるものではない。あくまでも中期日誌における 3 名とのかかわりがどうであったか、という事実的根拠の一部を示している。その関係性を含めて、現時点で全体像（限定して谷校長―藤田寮長時代の家庭学校）を捉えると、「試練」（「難有」）を中心理念として、校長・寮長（寮母）・寮生から構成される教育共同体が想定される。一種の理念型的概念として以下に明確にしてみよう（**資料 7**）。



資料 7.「試練」を理念とする教育共同体

説明

1)中心的理念：

礼拝堂内正面壇上に掲示されているのは「難有」であるが、より一般的に通用するとともに、古代イスラエルの典籍（旧約）からの訳語でいえば「試練」である。「苦難に耐える力」、「あらゆる患難に耐える強さ」27)、いずれにせよ、困難にむき合って克服することが期待される。働くことを価値づけている「流汗悟道」も、「暗渠の精神」28)なども中心的理念に属す。それらは人間のあり方が第一義的に重要なもと把握され、どう「成長」したかを根本的に重んずる教育理念として特徴づけられる。労働生産物の量、収益性といった経済的価値が考慮されないわけではないが、第一義ではない。

2)理念の提示：

谷個人の基軸的な意識においては「信仰と実践」29)として把握されるのかもしれないが、教育共同体としての役割という点で、理念をうけ継ぎつつ、生徒に対して、寮長夫婦に対して、地域社会（遠軽町）、あるいは一般社会に対して、種々の場面、機会を捉えて、共同体を構成するメンバーにむけて理念を求めて提示する、という働きがある。

3)理念の実証：

校長によって提示される中心的理念（「難有」）が、単に古典的根拠によって支えられるのみならず、寮生一人一人がどう生きてきたか、その足跡にかかわる身近な事実的根拠を有していることを、寮長の主観的な継承意識の有無は別して、日々の実践を通じて実証する。仮説に対する検証という性格をもっている。伝統的な契機の確認とともに、現代的諸課題を意識して、不断の検証が要請される。よって、教育共同体は、地域社会のなかで目に見える景観を有するが、出来上がったものではなく、不断に構築されるプロセスとなっている。藤田という単独個人によって担われるわけではなく、中心的理念を意識するかぎり寮長たちに共通する働きを要する。

4)困難克服：

「苦難に耐える力」の実践。消極的な課題から積極的課題までの幅が予想される。「不良性を除く」こと、身体的

疾患がある場合には、その治療を含む健康管理、愛着の不足を補う基本的信頼感の獲得、基本的生活習慣の形成、「年季」（先輩格）、「オヤ」（世話役）・新人の区別に則った集団生活の習慣形成、勤労の態度、生産活動の諸技術の習得、など、実社会での自立的生活の基盤を培うこと。

5)理解・実践

寮長及び寮母は、寮生一人一人を理解することが求められる。「生まれてから今日までの諸君の生い立ちが詳しく書かれている記録」を読みながら、「諸君の上に重くのしかかって、とうとう諸君をおしつぶしてしまった辛さや、悲しみ、苦しさがわかる」30)と、谷校長は語っている。藤田が寮生に課した作文も、その理解の試みの一つである。「家庭」であると同時に「学校」であるような、いずれも「感化」の力を重んずる環境構成が不可欠な実践となる 31)。

6)以上の 1)~5)と通じて、北海道家庭学校を特徴づければ、法制度的には児童福祉施設に属し、藤田在任中は教護院であり、現在では児童自立支援施設であるが、「試練」を中心的理念として構成員で結びつけられた教育共同体という概念像で普遍史的視野で捉えれば―時代的変化が突きつける課題に対応しつつ―持続的な形で成り立っている。その共同体の主要な構成員である寮生は、児童相談所の判断、家庭裁判所審判等を経て、「心ならずも」一定の所属性をもった者として「措置」されて入校・入寮するわけで、はじめから結社的絆で仲間と結合しているわけではない。入寮者の意識からすれば、むしろ、拒否的な警戒からはじまる。しかし、寮生活、作業班活動などを通じて、仲間、職員とのあいだで次第に結社的絆を形成する。そのプロセスは、「自然の感化力」に依存するとともに、人為的努力を要す。上記 2)3)にかかわる不断の構築作業が求められる。こうした両面性を備えた共同体として特徴づけられる。

以上の図と説明は、一種の理念型概念として提出するものである。第一義的には、事実認識の手立てとして設定する。一定の事実的根拠（歴史的事実）を部分的に有するが、藤田の谷との対話的関係の全体像を事実として指し示すものではない。そのように仮構のものとして限界づけられているものであるが、「試練」を理念とする教育共同体の構築、という側面の一つを近似的に捉える概念的手段になるだろう。寮長藤田の校長谷との対話的関係の様相とともに、それを踏まえた概念像を、本稿の成果として提出する。

この点を指摘した上で、残された課題を最後に指摘しておこう。1）寮母の役割について。家庭学校が今日のことばでいえば「家庭的養護」の機能を果たしていたとすれば、具体的にどのようにか。台所で寮母と寮生とが対話的にコミュニケーションしている状況が日誌でうかがえる。その様子についての藤田の認識は、どのような特質と意義を示していたか。2）少年の微笑について。藤田は、家庭学校着任当初から寮生の日々の生活のなかで見出されるユーモア、微笑を見逃さず、日誌にその様子を記述し続けた。その認識態度はどのような意味があったか。寮生の成長を促す「生きる力」にかかわるものでなかったか。3）以上の知見を加えることによって、谷校長―藤田寮長時代の家庭学校の教育共同体像は、どのように部分的に再構成されうるか、また、より一般普遍的には、どのような学校概念を理論的に提起することになるか。寮長藤田俊二の「成長」証明に徹した日誌世界とその実践は、汲み尽くし難い豊かさを含みながら、その固有性と普遍性にかかわる問題設定を、われわれに静かに迫っている。

注

1) 次の 3 つの拙稿を参照。「北海道家庭学校寮長藤田俊二年譜」『宮崎大学教育文化学部紀要』教育科学、第 27 号、2012 年 8 月、「北海道家庭学校寮長藤田俊二年譜・補遺」『宮崎大学教育学部紀要』教育科学、第 91 号、2014

年 8 月。「北海道家庭学校寮長藤田俊二の実践記録一覧」『宮崎大学教育文化学部紀要』教育科学、第 31 号、2014 年 8 月。家庭学校在任期間に記述した日誌を筆者は次のように３期に分けている。初期(1965.10～1969.3):17 名 整理番号 1− 17 藤田 33−36 歳 、中期(1969.4～1983.11):90 名 整理番号 18−107 37−51 歳 、後期(1983.12～1990.3):40 名 整理番号 108−147 52−58 歳。整理番号は、入寮順で(**1)のように表記している。

2) 拙稿「北海道家庭学校寮長藤田俊二の中期日誌における寮生理解について―対話的コミュニケーションの実践とその意義―」『教育科学論集』宮崎国際大教育学部紀要、第 9 号、pp.15-102、2022 年 12 月。

3)『留岡幸助著作集』第 4 巻、同朋舎、1980 年、p.470.

4) 同上、第 2 巻、p.267.

5) 谷昌恒『ひとむれ』第２集、評論社、1977 年、p.294。「留岡清男先生校葬式辞」より。

6) 講話のことを寮生たちは「今日の司会は谷先生です。」と呼び慣わしているが、式全体を司るものとして寮長たちに認識されていたのは「司式」である。当時、谷校長―藤田寮長時代に寮長を経験した軽部晴文（最初の勤務期間：1979.6.1-2007.8.31）現校長の筆者（河原）に対する証言（2023.8.31）による。

7) 谷『ひとむれ』第 2 集、pp.315-316。

8) 『マルティン・ブーバー著作集 1』(対話的原理Ｉ) 、みすず書房、1967 年、p.198。この「内的行為の相互性」は、「対向」（Hinwendung）ということのできる注意の働きとしておこなわれる。p.226.こうした運動が成り立つためには、互いが「自由な存在として向かいあうのであり、因果律のうちに引きいれられてもい」ない。p.68。

9）谷、同上、第 3 集、1981 年、に掲載されている。

10) 月 1 回の職員会議では、現場の実務上の運営統括は二人の部長（加藤正志教務部長、森田芳雄総務部長）に一任し、校長としての谷は、会議の最後に発言する程度であった、と当時の寮長軽部晴文（現校長）は筆者に証言している（2023.8.31）。谷自身の「管理者」としての意識は、谷昌恒『森のチャペルに集う子ら―北海道家庭学校のこと―』日本基督教団出版局、1993 年、p.138、において反省的に表されている。

11) 谷校長は、寮生というよりも、むしろ寮長にむけて講話していたように感じたと、当時寮長であった軽部晴文現校長は筆者に証言していた（2023.8.31）。こうしたその場の状況は、藤田が谷校長の講話をどううけとめていたか、という問題設定を根拠づけるものといえる。

12) マックス・ヴェーバー『古代ユダヤ教』(上)、岩波文庫、1996 年、p.133。

13) 「生産する労苦」と題した谷の論稿には「『ひとりがまき、一人が刈る』という聖書の言葉があります。『まく者も刈る者も、共々に喜ぶ』ともあります。…共々にその労苦の果実を分かちあって、社会が成り立ちうるのだと思います」。『ひとむれ』第 3 集、pp.125-126。

14) 「人生は試練あり」（明治 30 年）『留岡幸助著作集』第 1 巻、同朋舎、1978 年、pp.251-253。

15) 同上、第 5 巻、1981 年、p.107。幸助自身が尊敬する事業家金原明善にお願いした。林源十郎宛書簡。この経緯については、すでに杉井六郎「経営慢リニ費ス人間ノ力―日本福祉の源流を追う―」『社会福祉学』第 36 巻第 1 号、1995 年、が明らかにしている。

16) 唐突に響くかもしれないが、ここでマックス・ヴェーバーの歴史社会学論文における中心的な問題関心が想起される。禁欲的職業労働を通じて、みずからがいかに「選ばれた」者であることを「確証（Bewaehrung）」するか、ということが当事者たちにとって 切実な実践課題となった。『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の《精神》』梶山力訳、安藤英治編、未来社、1994 年、p.158、pp.197-198、参照。家庭学校の寮生たちにとって、―学校がプロテスタント系であるとはいえ―明確な教義（禁欲的プロテスタンティズム諸派の場合には予定説）に基づいた信仰が求められているわけではないが、長い人生の途上で経験する艱難がたんなる艱難に終始するわけではなく、自立にむかって人間形成できる―ミレーの「歩きはじめ」が描いているように―という希望に結びつくものであることを実践的に― ヴェーバーの表現でいえば―「確証」することが期待される。寮長には、そのよう

な人生の足跡であることを一人一人に即して、あるいは集団的傾向として、“実証”(Bewaehrung)することが望まれる（「予後指導」、アフターケアの実践はその一環）。

17) 谷『少年たちと生きる』日本基督教団出版局、1990 年、p.199。

18) 谷『森のチャペルに集う子ら―北海道家庭学校のこと―』日本基督教団出版局、1993 年、p.216。すでに 1973 年には「もともと、教育には二つの矛盾した課題を持つものだった」と指摘していた。『ひとむれ―北海道家庭学校の教育こと―』評論社、1974、p.271。

19) 谷『教育の理想―私たちの仕事―』評論社、1984 年、p.100。

20) 「覚悟」と題した 1979 年の谷の論稿の末尾には、こうある。「ことに、激しく変転する時代要請と、古い伝統を担う本校の教育理念を、たえず新しく問い直す。そういう指導上の内面的な問題を総括する責任も私にあります。北海道家庭学校は社会事業家の仕事ではありません。およそ教育の本質を追い求めることこそ、私たちの忘れてはならない一番大切な仕事であります」。谷『ひとむれ』第 3 集、1981 年、p.172。谷が校長在任中、機関誌『ひとむれ』には「教育特集号」が数回組まれている。本稿でふれた「日誌抄」はその 1 巻（1976.9.1）で収録されている。理念の提示と理念の実証という役割関係は、こうした編集と関連内容の掲載という協働関係にも示されている。

21) 谷『教育力の原点―家庭学校と少年たち―』岩波書店、1996 年、p.226。

22) 拙稿「藤田俊二未発表原稿『誰れが悪いのでもない―ある父子 1960 年から 1994 年 2 月までの日々―』―本文及びその主題設定の意義―」『宮崎大学教育文化学部紀要』教育科学、第 32 号、2015 年 3 月、参照。「通り魔」事件を起こした当の寮生がどのような内面的軌跡をたどったかを寮長として実証しようとする取り組みは、在任中より萌芽的に存在していた。「たゆたいの夏」と題して、藤田は『ひとむれ』480 号、1981 年 9 月 1 日、に発表した。全 4 頁(**資料 8**)。寮生自身が記した形で入校の日から半月の日々の日記を独自に構成した後、藤田は、その寮生が入校前に起こした事件の団地自治会会長のことばを引用し、そのうえで「M 団地の皆さんの前で姿を消した T 君が淋しい子だった事だけは覚えていて下さい」と結んでいる。

23) 拙稿「『ひとむれ』の対話的世界について」北海道家庭学校『ひとむれ再刊 1000 号記念特集号』、2022 年、p.52-54。

24) 谷『教育力の原点―家庭学校と少年たち―』p.227。

25) 花島政三郎『10 代施設ケア体験者の自立への試練』京都法政出版、1996 年。本書でも重点的に論じられている問題関心、寮生たちが卒業どのように職業生活していくか、という問題関心は、20 数年前、家庭学校着任当初から示され、寮生たちにも講話の機会に語られていた。本稿でとり上げた寮生 T(**33)は、次のように作文(1973.3.18)で記述していた。「今日の午前中は、学習ではないでした。今日の礼拝の話しは、卒業のことお話してくれました。初めに、人間が、日おつけ、または、どうおつかう。最近、二年間の初めの仕事は、何ヶ月稼いだか。そいうくはしいことお色いろ話した。先生は、初めの内人間のことおゆってくれました。卒業先生は、何ヶ月で、仕事おとりかえるか、または、何年で仕事おかえるか、卒業生 53 人、転職した 28 人、転職しない 25 人でした。一年目二年目三年目、一年目は、20%50%(ママ)　二年 50%、三年 50%とあがっていきました。そして、先生が、いろんな、ひょう（表）お見せてくれて、見ました。そして、仕事お、うつるとか、あまり、うつらないほうがいいとゆっていました。僕は、今先生が、なんで、こゆう、話しおしたか、わかりませんでした。僕では、今日の、先生の話しは、とてもいいことおゆってくれました。そして、さんびかお、うたい、さいごに、しょうえお、うたいました。今日の礼拝わ、ここで、終わりました。今日は、ひょう 3 つ見て、先生が、話してくれて、とてもいいと思いました。そして、寮に、かいって、先生が、話して、ひょうお、もっていきました。」。このような記述に対して、藤田は、「今日の礼拝司会は花島先生、最近 2 年間の卒業生の転職状況を詳しく表にしての有益なお話だったが、小学 5 年生の T が手帳をとりだしてせっせとメモしながら聞いていたのが印象的だっ

た。前の席では、4 月 1 日に旭川職訓（職業訓練校―河原注）に入校する T(別の寮生)がぼーんやり鼻糞ほじりながら聞いていただけに、尚更に印象的な光景だった。そして、とてもきちんとした日記が尚更に嬉しかったのである」。藤田は、しっかりとメモをとっていたこの寮生のうけとめのたしかさに感心するとともに、花島の寮生に対する問いかけに、―自分と共通する部分を見出すも―異なった部分も同時に感じとったであろう。単純化していえば、実証の着眼点にかかわって、統計的数字によって―この場合には安易に転職すれば困窮するであろうという事実について―客観的に確認するか、その時々の生の表出とその足跡によって内面的に確認するか、という違いである。花島の講話の翌日の藤田の日誌にはこうある。「T の日記を見ていると、男の文章だということをひしひしと感ずるのだ。余分な説明も余分な美辞もなく、何かスカッとした文章なのだ。子供の文章はこれでいいのだとしみじみ思う。夕方取っ組み合いをしていたら、『先生のケツ毛を抜いてやるぞ！』とほんとにケツに手をやったのには参った」。なにが書かれているか、という点とともに、場合によってはそれ以上にどのように書かれているか、通り一遍ではなく、自身の内部の生にどうかかわっているかに藤田は関心をむけている。このとき、誤字脱字、句読点などの問題は、些末事として視野の外におかれる。

26) マックス・ヴェーバー『古代ユダヤ教』（1920）の「序言」で、「パウロの伝道は、捕囚の民の宗教的経験に発する半ば埋もれていた一つのユダヤ教説と、結びついていたのであった。…まさにあのイザヤ書 40 章―55 章の預言者的苦難の論（Theodizee des Leidens）」があればこそ、パウロの伝道は成り立っていた、とヴェーバーは本論の膨大な歴史社会学研究論文を要約しつつ指摘していた。岩波文庫、上、p.23、参照。この論文で、ヴェーバーが論究している中心的な主題（の一つ）は、「罪なき苦難」に他ならない。強弱はあるが、普遍史的に繰り返される主題といえる。

27)谷『ひとむれ』第 2 集、p.64。

28) 谷『ひとむれ』第 1 集、p.145。

29) 谷『森のチャペルに集う子ら―北海道家庭学校のこと―』p.28。

30) 谷、同上、p.144。

31) 北海道家庭学校編『「家庭」であり、「学校」であること―北海道家庭学校の暮らしと教育―』2020 年、生活書院、は児童自立支援施設となっている現在でもなお、この二つのことが不可欠的に重要な原理であることを示している。「学校」であるとは、留岡幸助以来、人間形成の期待と機能をはたしている、ということを指しているが、この場合に「作業班活動」、或いは「生産教育」とも言われるように実社会がモデルとなっていることも、ここで忘れてはならない。

資料 8. 藤田俊二「たゆたいの夏」（1981）の最後の頁

機関誌『ひとむれ』480 号、1981 年 9 月 1 日、に掲載。この号には谷校長の「日食」と題した随想文（全 5 頁）も掲載されている。「大きな太陽が小さな月のかげに隠れてしまう」現象にふれて、「希望に太陽を、身近な些細なことのために見失うことがあるのです。…日食の日、私はしきりにそんなことを考えていました」と、「腹を立てると、私たちは物事の大小軽重が分からなくなる」事態を指摘する。「私たちは悲しみの底にある時、何故、自分ばかりがこんな辛い目に合わなければならないだろうと思うのです」。こう記して「しかし」と谷は続ける。谷のこの随想文と、藤田の文章は、等しくその時期の自然現象にふれて、みずからの人生の「苦しみ」にどうむき合うか、という問いに導かれている点で共通の基盤に支えられている。谷の場合には「苦しみ」を経験するであろう当事者(家庭学校の少年のみならず、「私たち」)にむけている。藤田の場合には―神社のお守りをくれた隣家のおばさんと対比して―その当事者が身近に住んでいるであろう地域社会にむけている。おそらくは予期しえぬ形で両者は補い合っている。対話的関係がここにも示されていた。

謝辞

本研究は、令和 3(2021)年度科学研究費助成事業(学術研究助成基金助成金)(基盤研究(C) の支援をうけた研究「北海道家庭学校寮長藤田俊二の＜成長証明＞的実践記録の特質と意義」（課題番号:21K02041）の成果の一部である。研究遂行に際しては、北海道家庭学校特別顧問家村昭矩氏、同校元校長で理事長仁原正幹氏、前校長清澤満氏、令和 5(2023)年 4 月以降の現校長軽部晴文氏のご理解、ご協力をえている。深く感謝申し上げる。

The Dialogic Relationship of Shunji Fujita, Housemaster of Hokkaido Home School, with Masatsune Tani, Principal of This School, and Its Significance:
Focusing on Fujita's Response to the Principal's Lecture, " Paul’s Letter to the Romans.

Kunio Kawahara

Key Words: dialogic relationship, trial and tribulation, educational community, Kosuke Tomeoka, Hokkaido Home School,confirmation

This paper examines the question of what kind of dialogical relationship Shunji Fujita, the dormitory head of the Hokkaido Home School, had with Masatsune Tani, the principal of the school. Using Fujita's diary as a clue, this paper traces Fujita's perception of Tani, based on the reactions of the dormitory students to the principal's lecture on Paul's "Letter to the Romans. The paper then examines the nature and significance of the relationship between Fujita and Tani, focusing on the relationship with founder Kosuke Tomeoka's essay on " Trial and Tribulation" before the school's opening. As a result, it became clear that Tani played the role of inheriting the central idea of the school, especially "Trial and Tribulation," as an idea and presenting it to the dormitory students and staff, while Fujita played the role of confirmation of its veracity by providing an empirical basis for the idea. Through an examination of the interactive relationship in which the mutuality of such cooperative actions was recognized, this paper has elucidated that the home school under the Tani and Fujita reigns was unceasingly building an educational community with "Trial and Tribulation," as its philosophy. We were also able to establish the composition of this community as an ideal type.